多賀城市文化財調査報告書 第34集

山王遺跡ほか

―発掘調査報告書―

平成5年3月

多賀城市埋蔵文化財調査センター

序　　文

本市は1300年の歴史を現代に活かしながら、東北における歴史拠点としての整備に努めるとともに、魅力に富んだ歴史的・文化的出会いとふれあいを創造する都市づくりを目ざしております。このため多賀城跡及びその周辺を古代東北の歴史を体験し、学習・憩うことのできる遺跡 博物館的空間の整備に努めてまいりました。近年では陸奥国府多賀城直営の製鉄所跡柏木遺跡が多賀城跡附寺跡として追加指定となり、現在復元整備の準備を進めているところであります。

さて、平成２年にＪＲ陸前山王駅の西側隣接地から四面廂付の大規模な建物が発見されましたが、これは「右大臣殿　餞馬収文」の木簡の出土と相俟って『国守の館』と推定されました。この発見は全国でも初めてのものとして注目を集め、かつ学術的にも非常に価値のあるものと評価されました。そこで本市では当遺跡の重要性を鑑み、文化庁、宮城県教育委員会の助言を得て、開発予定地を保存することとしました。保存にあたっては、特別史跡多賀城跡附寺跡に追加指定を前提としているため、平成 2年より３ケ年にわたり『国守の館』の範囲確認調査を実施してまいりました。今年度の調査では、『国守の館』の北辺と東辺を区画する道路跡を発見し、ほぼ一町四方の敷地を有していたことが判明しました。

最後になりましたが、本調査に御協力を賜わりました（株）かたくら建築工房、東北電力株式会社、そして、調査および保存協議に際して種々有益なご指導をいただきました文化庁、宮城県教育庁文化財保護課、宮城県多賀城跡調査研究所の関係各位に対して厚く御礼申し上げます。

平成５年３月

多賀城市埋蔵文化財調査センター
所　長　斎藤一司

例　　言

1．本書は平成４年度に国庫補助事業として実施した「山王遺跡ほか発掘調査」の成果をまとめたものである。

2．本書には山王千刈田遺跡（第18次）、山王遺跡（第19・20次）、高崎遺跡（第９次）の４件を収録し、このうち前３件については、「山王千刈田遺跡関連調査」として実施した。

3．本書中における各遺構の略号は次のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物跡、ＳＩ：竪穴住居跡、ＳＤ：溝跡、ＳＫ：土坑、ＳＸ：道路跡、その他

4．本書挿図中の水糸レベルは、標高値を示している。

5．調査区の実測基準線は、「平面直角座標系Ｘ」を使用し、方位の標示は座標北を用いた。

6．本報告書中の土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原1976）を使用した。

7．本書の執筆分担は、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ章の1，2を相沢清利、第Ⅲ・Ⅵ章の１を石川俊英、第Ⅳ章を石本　敬、第Ⅶ章を滝口　卓が担当した。また、第Ⅵ章の３については、多賀城市文化財調査報告書第26集より再録した。

8．発掘調査および報告書作成に際して、宮城県教育庁文化財保護課、東北歴史資料館、宮城県多賀城跡調査研究所の諸氏に御教示・御協力いただいた。

9．本書の作成にあたっては、菊池　豊、大山真由美、福原弥子、柏倉霜代、須藤美智子、熊谷純子、黒田啓子、陶山喜美栄の協力を得た。

10．調査・整理に関する諸記録および出土遺物は多賀城市埋蔵文化財調査センターで一括保存しているので活用されたい。

調　査　体　制

1．調査主体者：　多賀城市教育委員会　教育長　櫻井　茂男

2．調査担当者：　多賀城市埋蔵文化財調査センター

所　長　斎藤　一司

主任研究員　滝口　卓　　主査　赤坂みゑ子

研究員　石川　俊英　　千葉　孝弥

〃　　石本　敬　　相沢　清利

嘱　託　滝川ちかこ　　佐藤　祐子

調　査　要　項

〈山王千刈田遺跡（第18次）調査〉

1．遺跡所在地：　宮城県多賀城市山王字千刈田５番８外１筆

2．調査期間：　平成４年４月13日～６月10日

3．調査面積：　200㎡

4．担当職員：　石川　俊英　　相沢　清利

5．調査協力者：　株式会社　かたくら建築工房　　宮城県土地開発公社

〈山王遺跡第19次調査〉

1．遺跡所在地：　宮城県多賀城市山王字山王一区11―２

2．調査期間：　平成４年４月20日～６月３日

3．調査面積：　90㎡

4．担当職員：　石本　敬　　調査補助員：　菊池　豊

5．調査協力者：　東北電力株式会社

〈山王遺跡第20次調査〉

1．遺跡所在地：　宮城県多賀城市山王字山王三区34―１外６筆

2．調査期間：　平成４年６月10日～７月７日

3．調査面積：　130㎡

4．担当職員：　石川　俊英　　相沢　清利

5．調査協力者：　赤間　斎　　阿部　甲二

〈高崎遺跡第９次調査〉

1．遺跡所在地：　宮城県多賀城市留ヶ谷一丁目108番１

2．調査期間：　平成４年９月22日～10月22日

3．調査面積：　72㎡

4．担当職員：　滝口　卓

5．調査協力者：　佐藤　重　　佐藤　博

※　調査参加者：　赤間かつ子、阿部敏子、阿部美智子、阿部美津子、大山貞子、加藤文一、熊谷サツキ、後藤恵子、佐々木忠志、角田静子、渡辺幹子、小野玉乃、加藤昭一、菊地みち子、佐々木四郎、平山節子、松本喜一、渡辺ゆき子、菅野文夫、鈴木寿二、百々みち子、松戸大志

本 文 目 次

Ⅰ　山王遺跡の地理的・歴史的環境……1
Ⅱ　山王千刈田遺跡関連調査の目的……1
Ⅲ　山王千刈田遺跡（第18次）……3
　1　調査方法と経過……3
　2　調査成果……3
　3　小　　結……14
Ⅳ　山王遺跡第19次調査……19
　1　調査方法と経過……19
　2　調査成果……20
　3　小　　結……26
Ⅴ　山王遺跡第20次調査……29
　1　調査方法と経過……29
　2　調査成果……29
　3　小　　結……39
Ⅵ　考　　察……43
　1　山王千刈田遺跡（第９・18次）の調査成果について……43
　2　多賀城周辺（国府域）の調査成果について……46
　3　多賀城市山王千刈田遺跡の木簡について（再録）……平川　南……54
Ⅶ　高崎遺跡第９次調査……55
　1　高崎遺跡の立地と環境……55
　2　調査に至る経緯と調査方法……55
　3　調査成果……56
　4　ま と め……58

Ⅰ　山王遺跡の地理的・歴史的環境

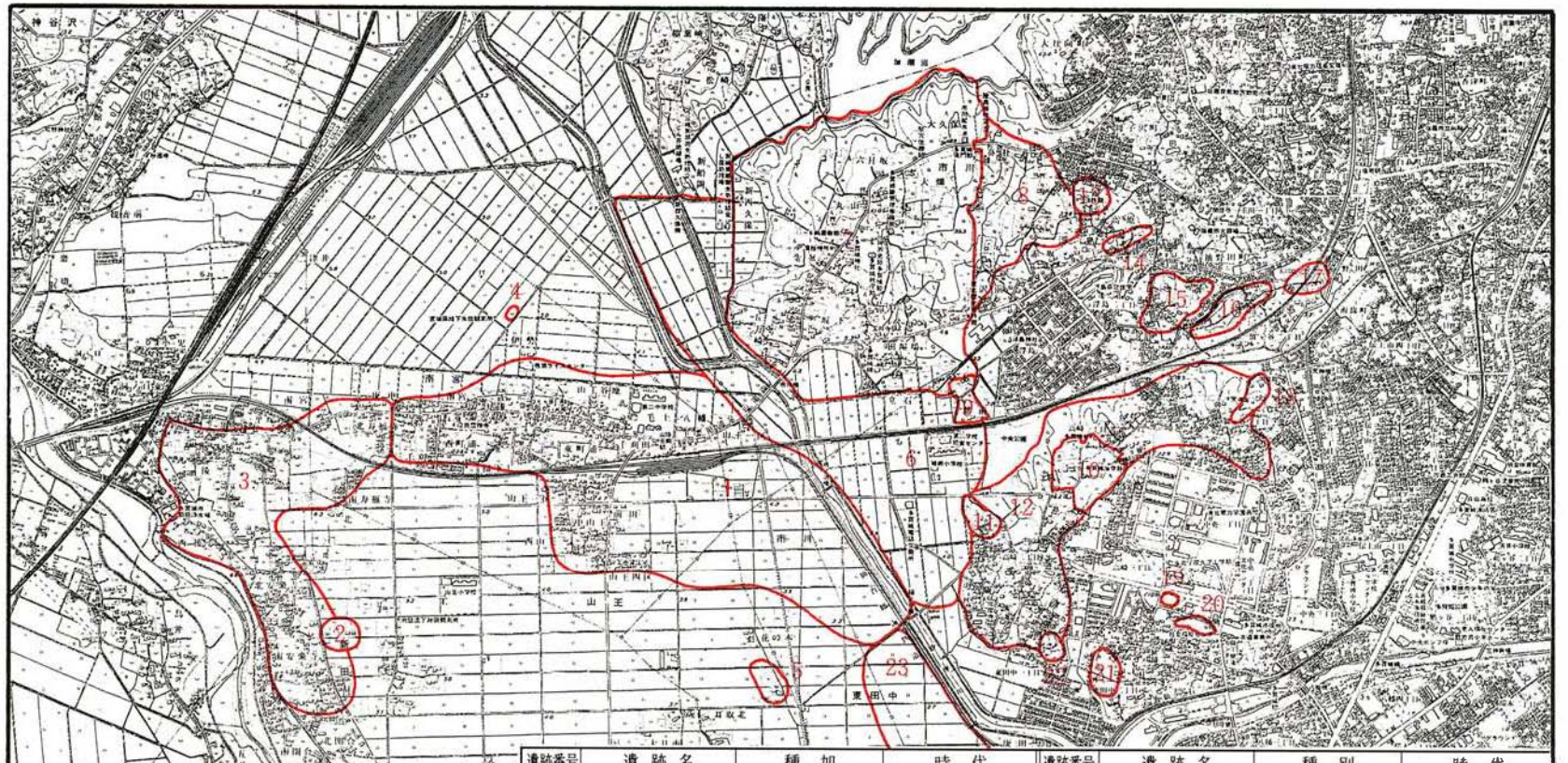
山王遺跡は仙台平野の北東端に位置し、東西に長い自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は山王・南宮の両地区を中心とする東西約２km、南北約１kmの広範囲にわたっている。この周辺の地質については、泥炭・有機質粘土～シルトと砂層の互層から形成される沖積層である。海抜は約４～５ｍを計る。

本遺跡の周辺には北東約0.5kmの丘陵上に特別史跡多賀城跡をはじめ、多賀城廃寺跡、国司クラスの上級官人の館と考えられている館前遺跡、市川橋遺跡大臣宮地区など、多賀城と密接な関連をもつ遺跡が存在する。このように本遺跡は、古代の国府周辺地域の様相を解明する上で重要な位置を占めている。

Ⅱ　山王千刈田遺跡関連調査の目的

平成２年に当センターが実施した山王遺跡第９次調査において、平安時代前半頃の『国守の館』と考えられる遺構が発見された。この遺構は全国でも初めてのものとして注目を集め、かつ学術的にも非常に価値の高いものと判断された。そこで当市では当地区の重要性を鑑み、文化庁、宮城県教育委員会の助言を得て、特別史跡多賀城跡附寺跡として追加指定し、遺跡を保存することになった。このため、平成２～４年度の３ケ年にわたって『国守の館』の敷地範囲を明らかにするための確認調査を実施してきた。

国府多賀城の周辺地域では、近年の発掘調査において、ほぼ１町（109m）単位で道路が検出され、ある程度の規則性をもった地割りが行われていたことが想定されている。このような調査結果より、『国守の館』の敷地についても道路による１町四方の区画がなされているものと推察された。今年度の範囲確認調査は、『国守の館』の中心建物とみられるＳＢ474四面廂付建物跡の規模の確定（第18次調査）、および、北辺と東辺を区画する道路跡の検出（第19・20次調査）を目的として実施した。



遺跡番号	遺跡名	種加	時代	遺跡番号	遺跡名	種別	時代
1	山王遺跡	集落跡	古墳・奈良～中世	13	法性院遺跡	散布地	奈良・平安
2	安楽寺遺跡	寺院跡	古代・中世	14	高原遺跡	〃	〃
3	新田遺跡	集落跡	古墳・奈良～近世	15	小沢原遺跡	〃	〃
4	内館跡	館跡	中世	16	野田館跡	散布地・館跡	奈良・平安・中世
5	大日北遺跡	散布地	奈良・平安	17	矢作ケ館跡	〃	〃
6	市川橋遺跡	集落跡・水田跡	〃	18	留ケ谷遺跡	〃	奈良～近世
7	特別史跡　多賀城跡	国府跡	奈良・平安・中世	19	稲荷殿古墳	高塚古墳(円)	古墳(後)
8	西沢遺跡	散布地	奈良・平安	20	桜井館跡	館跡	中世
9	館前遺跡	官衛・館跡	平安・中世	21	志引遺跡	包含地・館跡	旧石器・奈良～中世
10	特別史跡多賀城廃寺跡	寺院跡	奈良・平安	22	東田中窪前遺跡	散布地・館跡	奈良・平安・中世
11	丸山囲古墳群	高塚古墳(円)	古墳	23	六貫田遺跡	散布地	奈良・平安
12	高崎遺跡	集落跡・館跡	奈良・平安・中世				

第1図　多賀城市遺跡分布図（西部）

Ⅲ　山王千刈田遺跡（第18次）

1　調査方法と経過

今回の調査については『国守の館』の中心施設と見られるＳＢ474建物跡の全容把握を目的として実施した。調査は平成４年４月14日から重機による表土剝離より開始した。調査区内の基本層位は、前回の調査によってある程度判明しており、北側は地山直上、南側については第Ⅲ層上面までの盛土や堆積土を除去する。調査については、基本的に確認のみにとどめた。４月17日から遺構検出作業に入る。20日には遺構を傷付けない程度に調査区に沿って土層観察を兼ねた排水路を掘る。さらに調査区南側に堆積していた第Ⅲ層を除去し、第Ⅳ層上面から柱穴等を検出する。検出された柱穴の中には、ＳＢ474 建物跡の調査成果から判断して、これと一連の柱穴と理解できるものがあり、位置関係及び埋土の特徴から、これらが建物跡の東妻を構成することが明らかとなった。さらに調査区南東部の第Ⅳ層上面で検出した廂は、これまで検出した中でも良好な状態を保っていた。この部分を検討することによって、身舎同様４時期の変遷が把握できた。これによってＳＢ474 は桁行９間、梁行４間の規模を有することが確認され一貫して四面廂付建物跡であることも判明した（28日）。この他に地山上で検出した遺構にはＳＢ651がある。本建物はＳＢ474の北側に隣接した場所にあり、柱筋や主軸方向がＳＢ474とほぼ同じである。さらに前回の調査で検出したＳＤ535・536の延長部も見つかっている。５月６日より調査区内に実測図作成のため、国家座標を使用した簡易遣り方を設定し、平面図作成に入る。検出した遺構の中には年代や性格等が不明な土坑があり、これらについては必要最小限度の掘り下げを行った。ＳＢ474については、平面形において４時期の変遷を確認しており、検証のため一部柱穴の断ち割りを行った。他遺構についても写真撮影、平面形作成等を行い、20日には全景写真を撮る。27日宮城県教育庁文化財保護課、東北歴史資料館、多賀城跡調査研究所の職員等で今回の調査成果について検討を行う。翌28・29日の両日若干の補足調査を行い調査を終了する。６月３日より遺構面の保護を目的として砂を搬入する。10日埋め戻し作業の終了をもって全ての調査を完了した。

2　調　査　成　果

1．検出遺構と遺物

（1）掘立柱建物跡

ＳＢ474： 今回の調査区西側より東妻を検出した。この結果、本建物跡は桁行９間、梁行４

間の東西棟四面廂付建物跡であることが確定した。重複関係からＳＢ475、491より古く、ＳＢ650、ＳＫ512より新しい。建物跡は同位置内で３度建て替えがあり、身舎部分には床束や間仕切りと思われるものが認められる。柱穴は身舎及び廂部分共に同様な形状を呈するものであるが、廂部分が全体的に規模が小さくなっている。以下古い順に説明を加える。

ＳＢ474（Ａ）遺存状況は身舎北側及び東妻が比較的良好である。柱穴の規模は、身舎東妻北より１間目を参考にすれば0.75×1.0ｍである。同様に廂部分についても検出面が明らかで遺存状況が一番良好な南東隅を見ると0.75×0.95ｍを計る。平面形はいずれも方形を呈している。埋土は身舎柱穴には地山ブロックを含んだ黒褐色シルトである。廂柱穴は灰黄色土が主体となっており、地山土と褐色シルトが互層になっている部分も認められる。

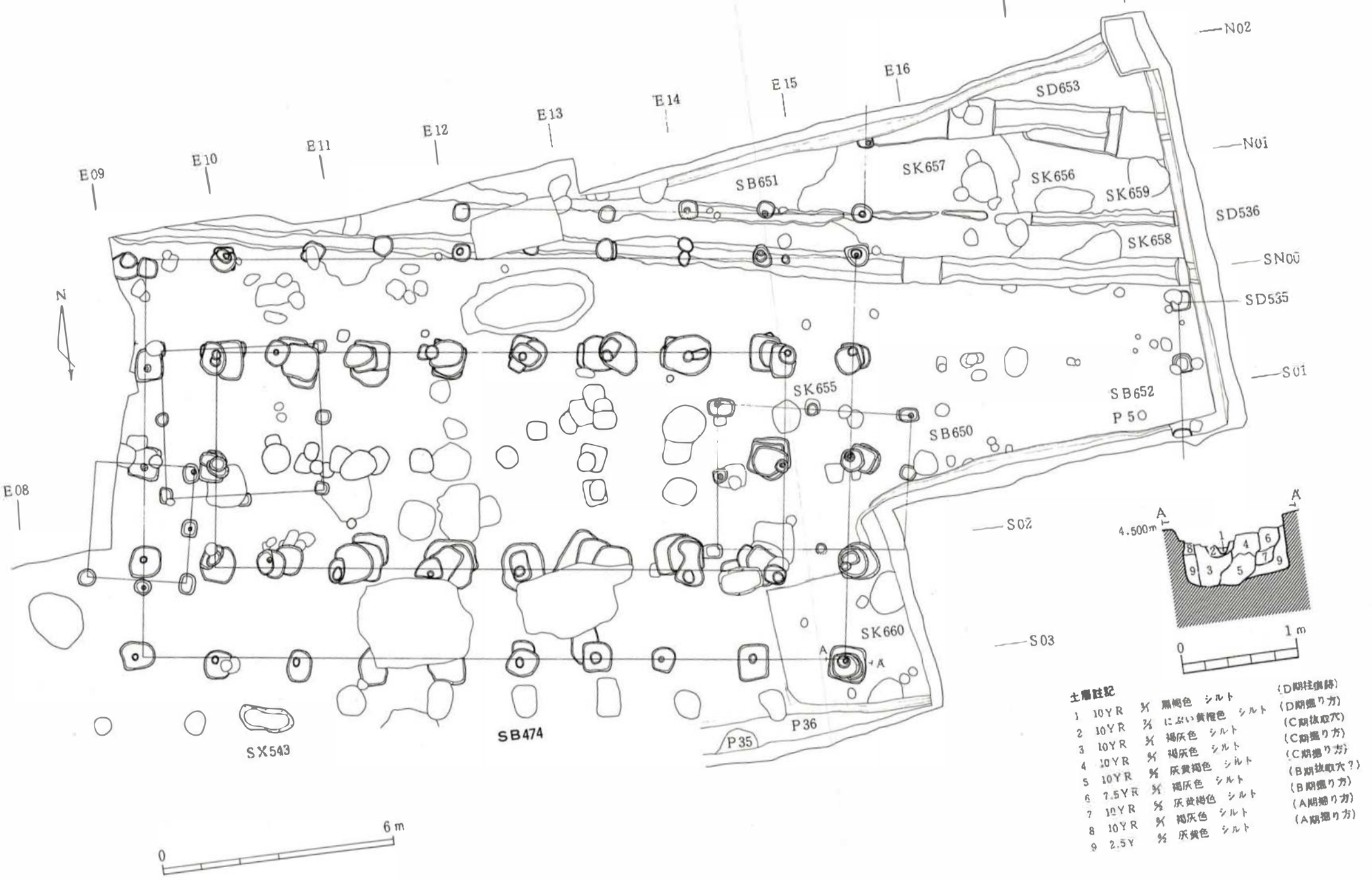
ＳＢ474（Ｂ）柱穴の平面形、規模はＡ期と同一箇所を参考にする。身舎柱穴は0.8×0.8ｍの方形を呈している。廂部分についてもＡ期と同一箇所を見ると、規模は不明であるが、平面形は方形を基調とするものと思われる。埋土は身舎柱穴にはＡ期同様黒褐色シルトであるが焼土ブロック、炭火物、灰などを含んでいる。廂部分には上層が褐灰色シルト、下層は灰黄褐色シルトで、これらの層中には地山ブロック、炭化物を含んでいる。

ＳＢ474（Ｃ）身舎及び廂部分の柱穴の形状や規模について見ると、Ａ・Ｂ期が方形を基調とするのに対し、本期の多くは不整形を呈するようになり、規模も若干小さくなる傾向が見られる。また、本期の身舎及び廂部分の柱穴の一部には、柱抜取穴と考えられるものも今回検出している。柱間は柱痕跡が検出されないものが多く不明となっている。柱は一部確認された柱痕跡より径約20cm前後の円形を呈している。埋土は身舎部分についてはＡ・Ｂ期同様黒褐色シルトである。廂部分もＢ期と同様な状況である。これらの層中には灰白色火山灰粒子、焼土ブロックを多く含んでいるのが特徴である。このことからＢ期は、火災のため焼失したものと思われる。なお、Ｂ・Ｃ期に相当する身舎柱穴の一部には礎板が検出されている。

ＳＢ474（Ｄ）身舎及び廂部分の柱穴は、Ｃ期と同様形状は不整形となる。さらに規模も縮小する。建物跡の方向は、柱痕跡を確認した北側柱列で見ると東で８度６分南に偏している。身舎桁行柱間は北側柱列西より1.54ｍ・2.35ｍ・1.65ｍ・2.34ｍ・2.13ｍ・2.09ｍ・2.49ｍで総長14.59ｍである。南側柱列では西より1.54ｍ・1.77ｍ・2.37ｍ・2.30ｍ・２間分で4.32ｍ・2.29ｍで総長14.59ｍを計る。梁行柱間は東妻北より2.87ｍ・2.90ｍで総長5.77ｍ、西妻も北より2.88ｍ・2.63ｍで総長5.51ｍを計る。次に廂桁行柱間について見ると北側柱列西より1.96ｍ・３間分で6.09ｍ・２間分で3.92ｍ・1.94ｍ・1.99ｍ・2.47ｍで総長18.37ｍ、南側柱列西より2.12ｍ・1.52ｍ・３間分で6.36ｍ・1.99ｍ・2.09ｍ・1.97ｍ・2.34ｍで総長18.39ｍを計る。梁行柱間は東妻北より2.47ｍ・2.69ｍ・2.86ｍ・2.46ｍで総長10.48ｍ、西妻も北より2.63ｍ・2.54ｍ・2.41ｍ・2.53ｍで総長10.11ｍを計る。柱は確認された柱痕跡より身舎部分では径

第1図 検出遺構全体図

※ ■はB₁期の遺構を示す



第2図　第18次調査検出遺構全体図

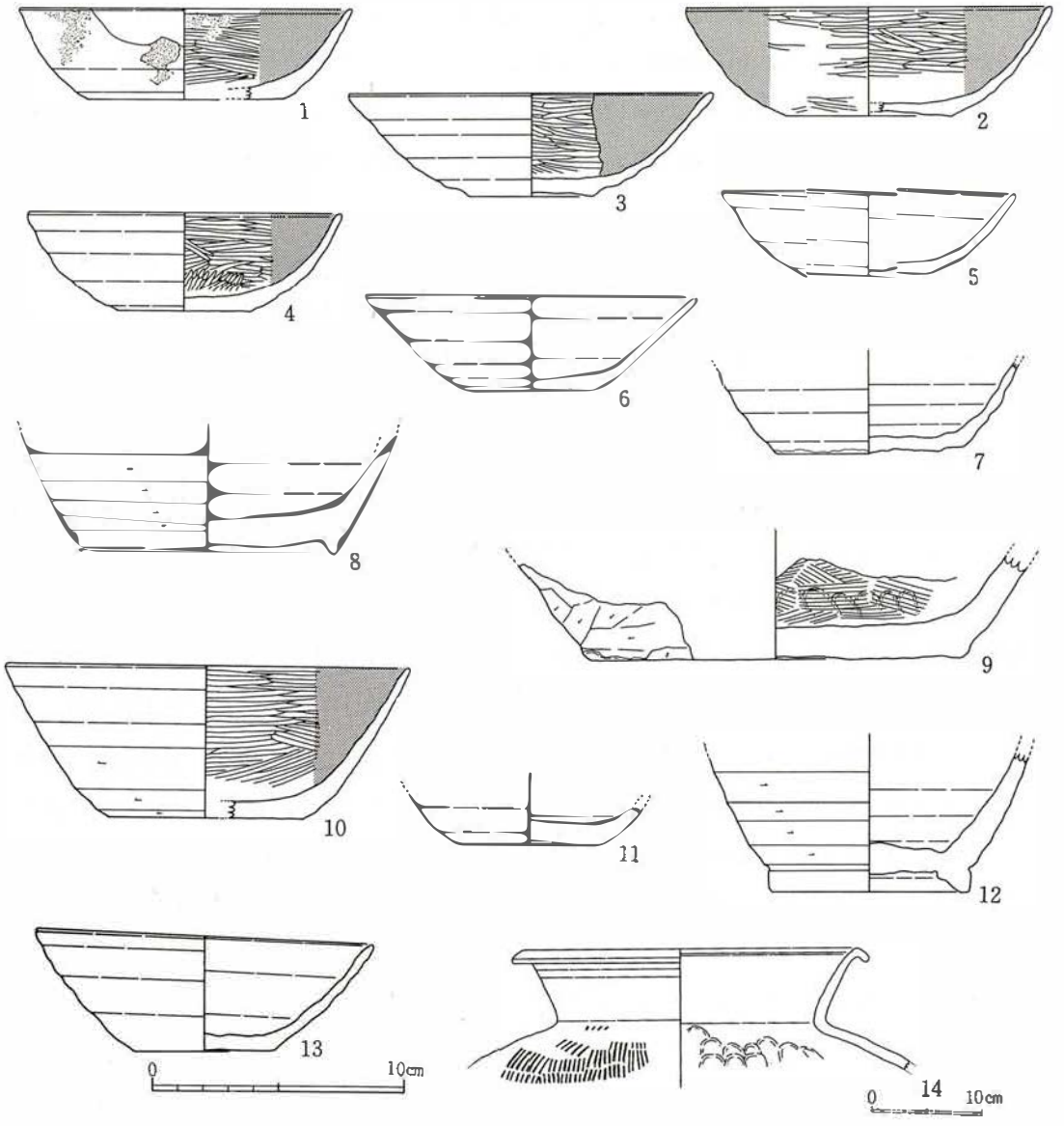
15～25cm、廂部分は径15～18cmである。埋土は身舎部分についてはA～C期と類似している。廂部分は地山土を含んだにぶい黄橙色シルトである。今回出土した遺物を各期頃に整理するとB期では土師器杯・甕・順恵器杯・高台付杯・甕・長頸瓶、赤焼き土器杯が出土している。C期では前述の他に灰釉陶器椀、緑釉陶器椀、平瓦が出土している。D期でも同様の遺物が出土している。

SB475： 調査区南側の第Ⅳ層上面で検出した。本建物跡は前回の調査では、規模が判明しなかったが今回の調査によって桁行5間、梁行1間の東西棟掘立柱建物跡と確定した。 SB474、SK499・501・502と重複しており、これらより新しい。建物跡の方向は、柱痕跡を検出している北側柱列を見ると東で7度6分南に偏している。桁行柱間は北側柱列西より2.37m・2間分で4.48m・2間分で4.31mで総長11.17mである。 梁行柱間は西妻では北より3.71mを計る。柱穴は方形もしくは円形を呈するもので一様ではない。埋土は灰白色火山灰を含む褐灰色シルトである。柱は確認された柱痕跡より径約20～30cmの円形を呈する。今回出土した遺物は土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯がある。

SB650： 調査区南西隅のⅣ層上面で検出した桁行2間、梁行2間の東西棟掘立柱建物跡である。SB474と重複し、これより古い。建物跡の方向は北側柱列を見ると東で11度9分南に偏している。桁行柱間は、北側柱列西より2.48m・2.53mで総長5.01mである。梁行柱間は西妻で北より1.87m・1.88mで総長3.75mを計る。柱穴は方形もしくは円形を呈するもので一様ではない。柱は確認された柱痕跡より径13～22cmの円形を呈している。埋土は炭化物、地山粒子を含む黒褐色シルトである。遺物は土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯が出土している。

SB651： 調査区北西隅の地山上から検出した。東西5間分、南北1間以上の規模をもつ掘立柱建物跡である。本建物跡は延びが調査区北側に及んでいるため全容については不明である。SD536・653と重複し、これらより新しい。建物跡の方向は、南側柱列で柱痕跡を検出している柱列南東隅と4間目を結んだ線で見ると東で8度7分南に偏している。柱間について見ると柱痕跡を確認していない柱穴をその中心に想定すると南側柱列東より2.49m・2.01m・2.07m・2間分で約3.83mで総長約10.4mまで検出した。東側柱列は南より1.84mまで検出した。柱穴は円形もしくは方形を呈するもので一様ではない。埋土は上層に浅黄色シルト、下層には褐灰色シルトで、これらの層中には地山ブロックを含んでいる。柱は確認された柱痕跡より径約20cm前後の円形を呈する。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。

SB652： 調査区東壁際の地山上から検出した。建物跡の延びが調査区外に及んでいるため西側柱列2間分まで検出したにすぎない。建物跡の方向は、柱痕跡を確認していないものもあるため不明である。柱穴は方形を呈し長辺51cm、短辺47cmを計る。埋土は地山粒子を含む褐灰



（単位cm）

番号	種別	器種	遺構・層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	登録番号
1	土師器	椀	SB474	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	½	(13.4)	(7.8)	(3.6)	内・外面に付着物	R－4
2	土師器	椀	SB474	ヘラミガキ、黒色処理 底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理		(14.6)	(6.6)	(4.3)		R－3
3	土師器	椀	SB474	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	½	(14.6)	5.0	(4.1)		R－2
4	土師器	椀	SB474	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	½	(12.6)	(5.4)	3.9		R－1
5	赤焼き土器	椀	P5 柱痕跡	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ		13.2	5.1	4.8		R－10
6	赤焼き土器	椀	P36 埋土	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ		(11.6)	4.8	3.4		R－11
7	須恵器	椀	SD535埋土	ロクロナデ、底部：回転ヘラ切	ロクロナデ			7.4			R－17
8	須恵器	壺	SD535埋土	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ			10.4			R－7
9	須恵器	甕	SD536埋土	手持ちヘラケズリ	ナデ			15.2			R－9
10	土師器	椀	SD653埋土	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理		(16.2)	(7.8)	6.0		R－16
11	須恵器	椀	SD653埋土	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ			5.8			R－19
12	須恵器	壺	SD653埋土	ロクロナデ	ロクロナデ			(8.0)			R－8
13	赤焼き土器	椀	SK685埋土	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ		(13.6)	5.7	4.6		R－5
14	須恵器	甕	SD535埋土	ロクロナデ、平行叩き	ロクロナデ、指ナデ		(32.3)			SD536・SB474と接合	R－6

第3図　出　土　遺　物（1）

色シルトである。柱は確認された柱痕跡より径15cmの円形を呈する。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、赤焼き土器杯が出土している。

（2）溝　跡

ＳＤ535：調査区中央部の地山上から検出した東西方向の溝跡である。前回の調査分を含めると長さ約27.2mまで検出した。ＳＢ474、ＳＫ658と重複し、これらより新しい。規模は幅50～70cm、深さ約20cmを計る。埋土は褐灰色シルトの単一層である。今回出土した遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕・長頸瓶、赤焼き土器杯、平瓦、砥石がある。

ＳＤ536：ＳＤ535の北側の地山上から検出した東西方向の溝跡である。前回の調査分を含めると長さ約20cmまで検出した。重複関係からＳＢ656より古く、ＳＫ656より新しい。規模は幅10～40cm、深さ４cmである。埋土は褐灰色シルトの単一層である。今回出土した遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕がある。

ＳＤ653：調査区北側の地山上で検出した東西方向の溝跡である。ＳＢ651、ＳＫ659と重複し、これらより古い。規模は長さ約5.8mまで検出した。幅は0.9～1.35m、深さ約30cmを計る。埋土はにぶい黄橙色で、地山土に褐色土が染状に入る。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕・長頸瓶・瑞、灰釉陶器把手付瓶、円盤状土製品が出土している。

（3）土　坑

ＳＫ655：調査区西側の地山上で検出した土坑である。平面形は南北に長い楕円形を呈する。規模は長径82cm、短径75cmを計る。埋土は灰白色火山灰、炭化物を含む黒褐色シルトである。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、平瓦、硯（転用硯）が出土している。

ＳＫ656：調査区東側の地山上で検出した土坑である。ＳＤ536と重複し、これより古い。平面形は北東方向に長い不整形を呈する。規模は意辺1.41m、深さは10cmである。埋土は地山ブロックを含む褐灰色シルトである。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、平瓦が出土している。

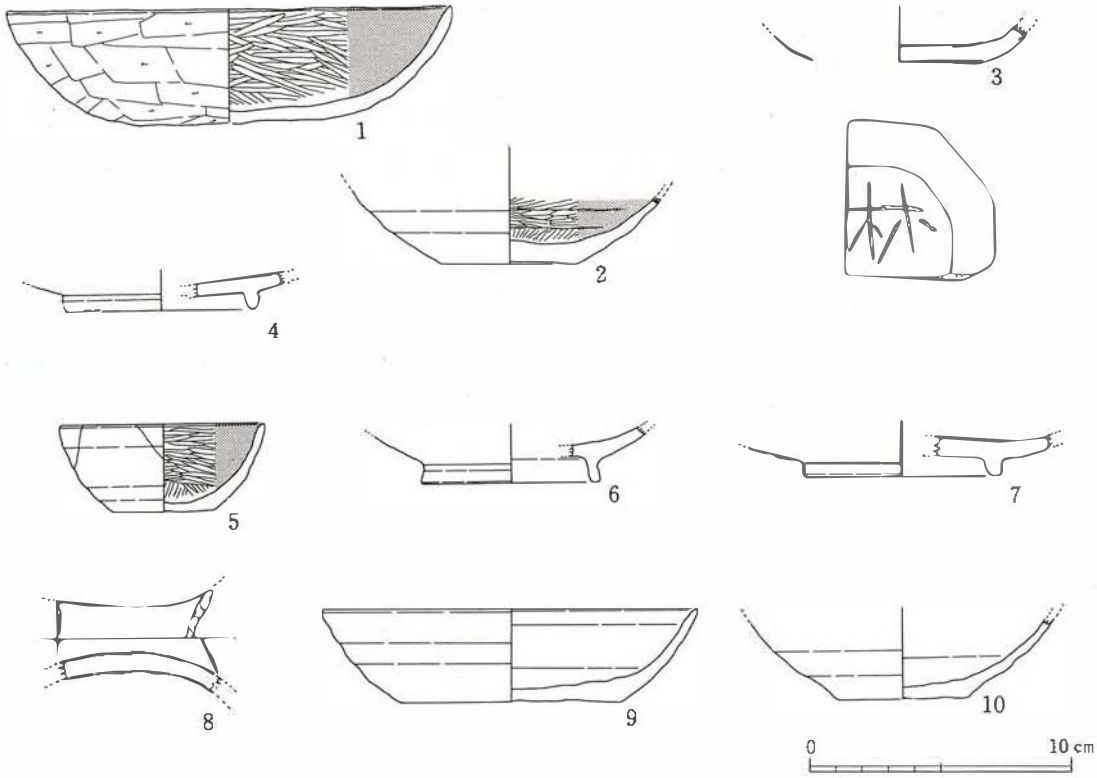
ＳＫ657：調査区北側の地山上で検出した土坑である。　平面形は南北に長い楕円形状を呈る。規模は長辺約１ｍ、短辺86cmを計る。埋土は炭化物、地山ブロックを多量に含む黒色シルトである。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。

ＳＫ658：調査区東側の地山上で検出した土坑である。ＳＤ536と重複し、これより古い。平面形は不整形を呈している。埋土は炭化物を含む黒色シルトである。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土している。

ＳＫ659：調査区東壁際の地山上で検出した土坑である。ＳＤ653と重複し、　これより新し

い。平面形は方形状を呈し、規模は長辺1.02m、短辺99cmまで検出した。埋土は砂や炭化物を含む暗褐色粘土である。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、平瓦が出土している。

ＳＫ660：調査区南側のⅣ層上面で検出した土坑である。平面形は一部調査区外に及んでいるが方形状を呈するものと見られる。規模は長辺1.1m以上、短辺91cm以上を計る。埋土は地山ブロックを含む黒褐色シルトである。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕・長頸瓶、赤焼き土器杯が出土している。



（単位.cm）

番号	種別	器種	遺構・層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	登録番号
1	土師器	杯	第Ⅰ層	ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理		(17.3)		4.4		R—14
2	土師器	杯	〃	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	底		(5.4)			R—20
3	須恵器	杯	〃	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ			(6.6)		底部にヘラ描き「林」	R—63
4	灰釉陶器	皿	〃	ロクロナデ	ロクロナデ			(7.0)			R—48
5	土師器	杯	第Ⅲ層	ロクロナデ、ヘラミガキ 回転ヘラ　ぶり	ロクロナデ、黒色処理	底	(8.0)	(4.0)	3.3		R—12
6	緑釉陶器	皿	第Ⅰ層	ロクロナデ	ロクロナデ			(7.0)			R—23
7	灰釉陶器	皿	第Ⅱ層	ロクロナデ	ロクロナデ			(7.6)			R—45
8	土師器	把手?	第Ⅲ層								R—22
9	須恵器	杯	〃	ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	底	(14.4)	8.6	(3.5)		R—13
10	赤焼き土器	杯	〃	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ			(5.0)		底部にヘラ描き「[illegible]」	R—18

第4図　出　土　遺　物 (2)

(単位cm)

番号	種別	遺構・層位	備考	登録番号
1	円盤状土製品	第Ⅱ層	須恵器 甕	R—67
2	円盤状土製品	第Ⅲ層	須恵器 甕 タタキ	R—68
3	円盤状土製品	SD653 埋土	土師器	R—65
4	円盤状土製品	P35 埋土	土師器	R—66
5	砥石	第Ⅲ層		R—71
6	砥石	第Ⅰ層		R—72
7	砥石	SD535 埋土		R—69

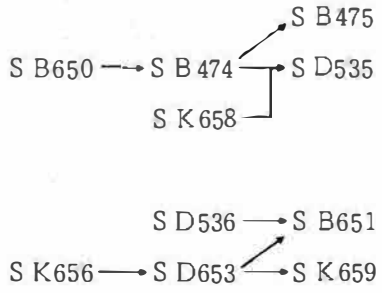
第5図 出土遺物(3)

3　小　　結

今回の調査の目的は『国守の館』の中心施設であるＳＢ474の規模の確認であった。調査成果について簡略にまとめると以下のことが判明した。

1　調査の結果掘立柱建物跡５棟、溝跡３条、土坑６基、小柱穴多数を検出した。この内ＳＢ474と475は今回の調査によって規模が判明したものである。また溝跡２条については、前回調査した遺構の延長部を検出している。

2　検出したこれらの遺構の重複関係を整理すると以下のようになる。



重複関係が認められないもの

ＳＢ652
ＳＫ655
ＳＫ657
ＳＫ660

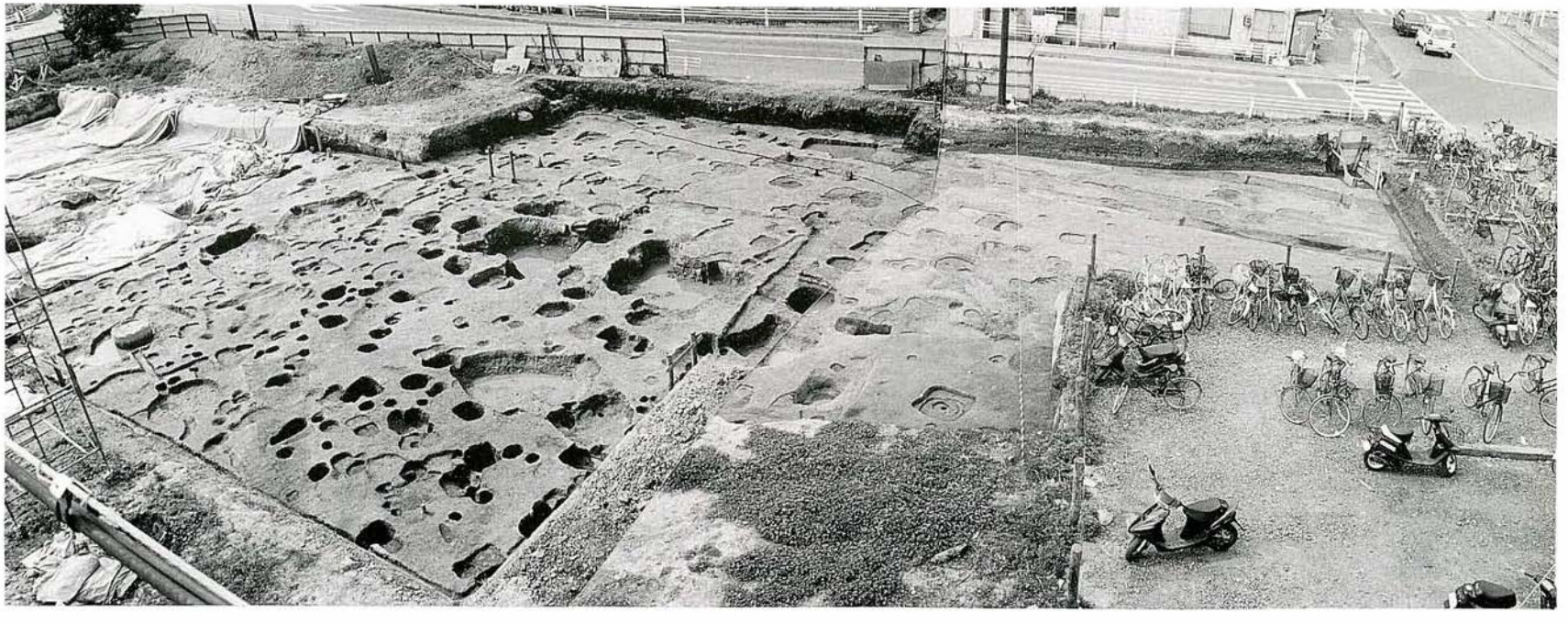
3　ＳＢ474の規模は桁行９間、梁行４間の四面廂付建物跡であることが確認された。

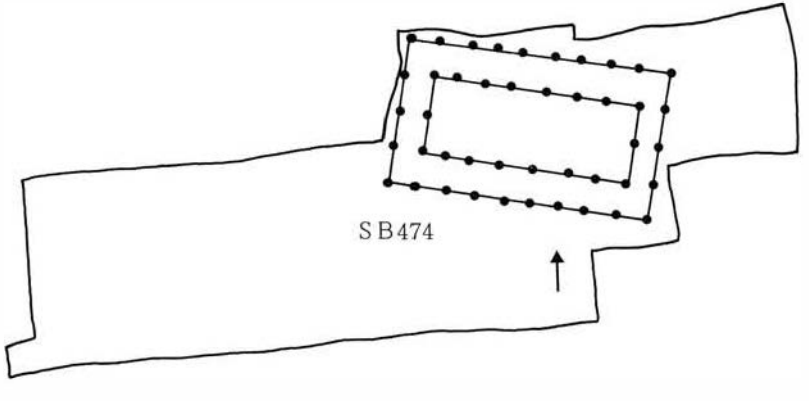
4　建物跡の身舎柱穴及び廂柱穴はともに４時期の変遷が認められた。このことによって一貫して同じ規模を持つことを確認した。

5　ＳＢ474の年代は、出土遺物の特徴や灰白色火山灰（註）等より、10世紀前半を中心とする時期であることを再確認した。

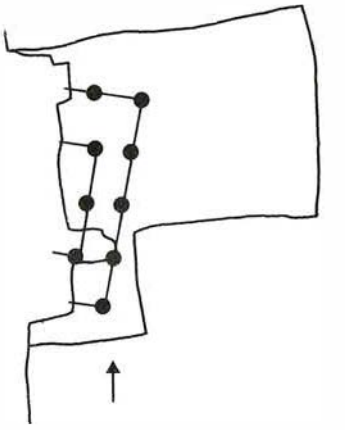
6　この他、ＳＢ474と重複、近接するＳＢ650・651については、柱穴の切り合いや埋土の状況、位置関係から、ＳＢ650は一時期古い建物跡であり、ＳＢ651は新しい建物跡であることが判明した。

〈註〉白鳥良一『多賀城跡出土土器の変遷』宮城県多賀城跡調査研究所「研究紀要Ⅶ」（1980）
宮城県多賀城跡調査研究所『多賀城跡―政庁跡本文編―』（1982）

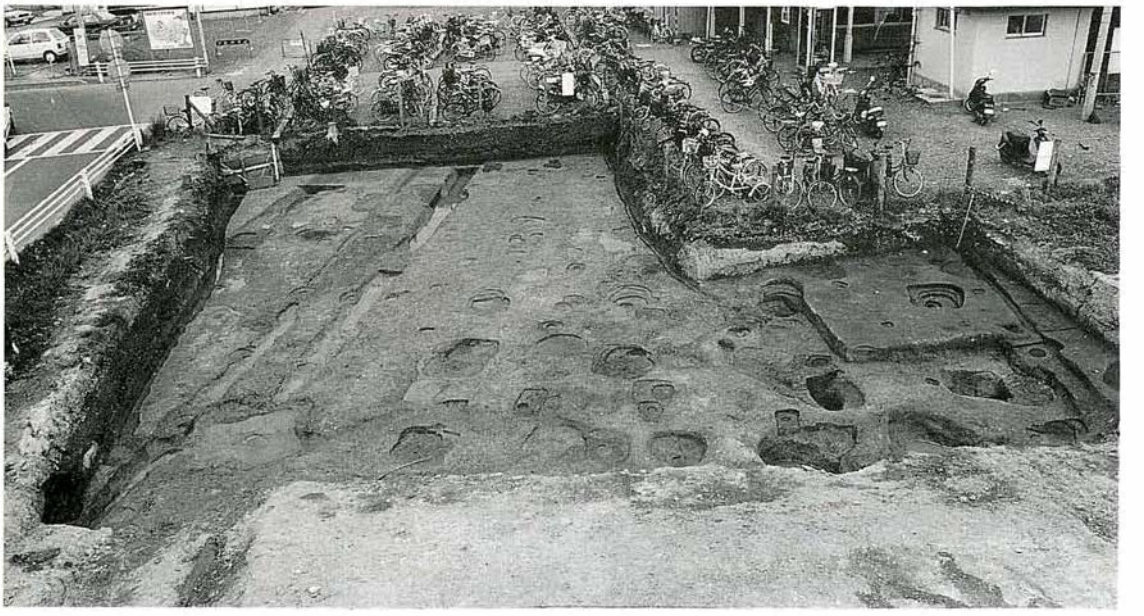




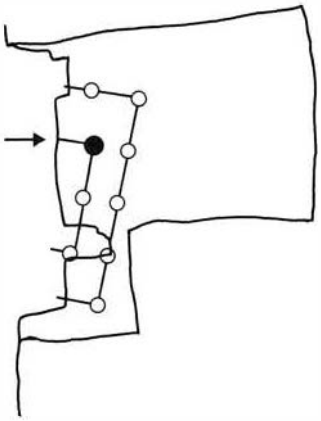
SB474　全　　景（平成２年度調査、平成４年度調査合成写真）（南より）



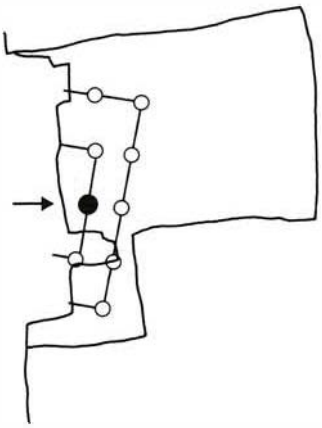
ＳＢ474　東妻検出状況（南より）

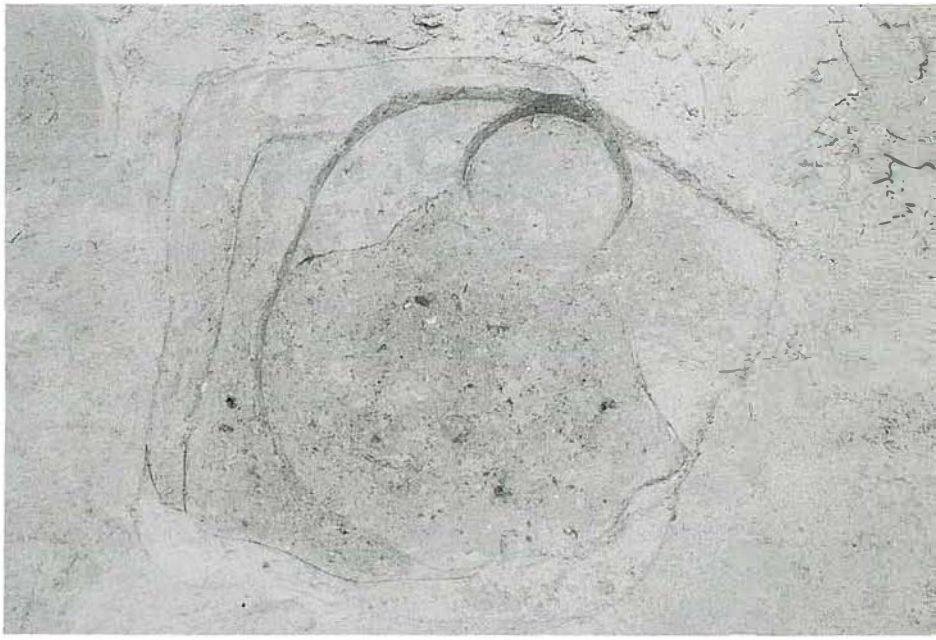


ＳＢ474　東妻検出状況（西より）

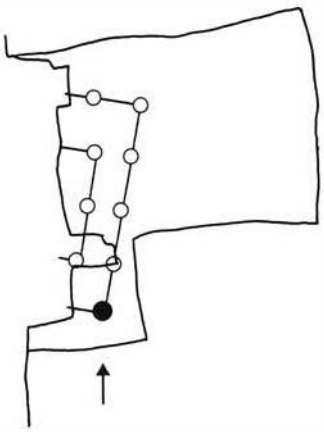


ＳＢ474　柱穴検出状況

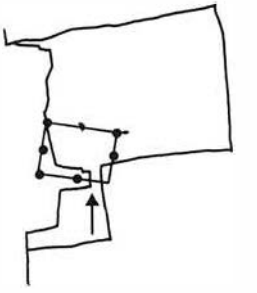




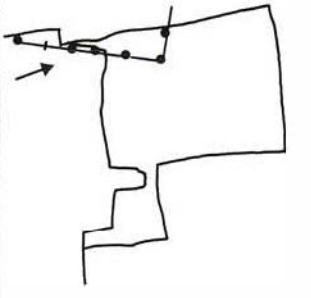
ＳＢ474　柱穴検出状況



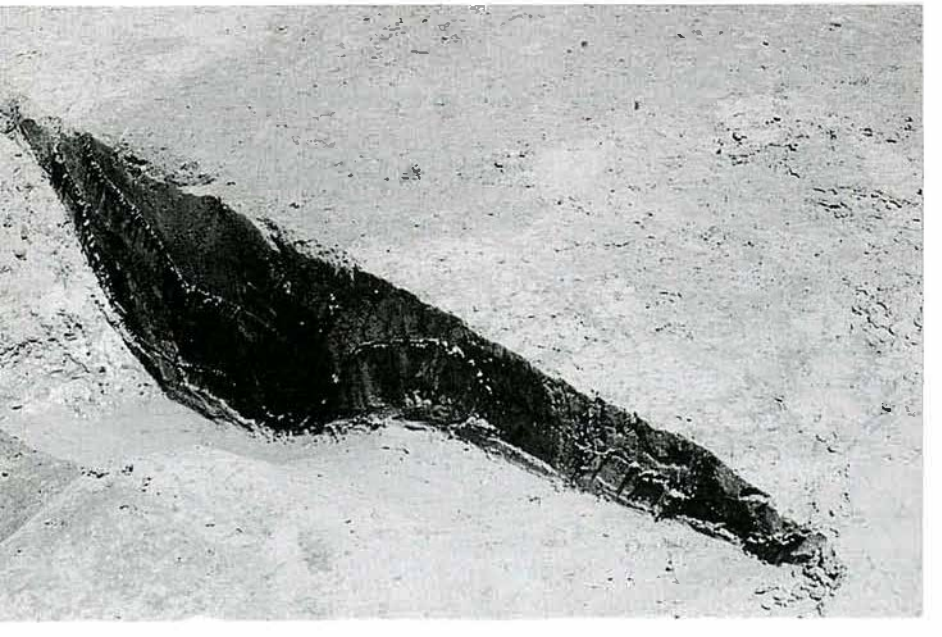
ＳＢ474　柱穴土層堆積状況

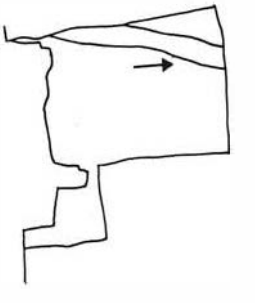


S B650　検出状況
（南より）



S B651　検出状況
（西より）





S D653　土層堆積状況
（西より）

Ⅳ　山王遺跡第19次調査

1　調査方法と経過

今回の調査は、山王千刈田遺跡において発見された『国守の館』の敷地の北辺を画する東西道路跡の確認を目的として実施した。山王千刈田遺跡の調査区周辺は、現在住宅等が密集して建てられており、『国守の館』の直接の区画施設を発見するための調査を行うことは、現時点では不可能といわざるを得ない。しかし、近年の発掘調査の成果により、平安時代の国府多賀城の周辺地域には、ほぼ１町(約109ｍ）を基本単位とした、道路を区画施設とする方格地割りが行われていたことが明らかになってきている。そして、山王千刈田遺跡において発見された建物群も、この地割りの規制にのっとった配置をとっていることから、この調査区に一番近い位置につくられた各道路跡が、つまりは『国守の館』の敷地の四方を画する施設と同様のものであろうことが導き出せた。そこで、北辺を画する道路跡の発見を目的とした今回の調査では山王千刈田遺跡の北東側ですでに発見されている東西道路跡を１町北側を走る道路跡であると考え、そこから約109ｍ南に離れた位置を道路推定ラインとして調査区を設定した。 なお、本調査区は、山王千刈田遺跡からは東へ約200ｍ離れている。

本調査区は、東北電力株式会社の所有地であり、現在松や柳等が植林されている。調査にあたっては、東北電力株式会社の協力により、当該地のうち 200㎡を埋蔵文化財発掘調査用地として無償貸付を受け、平成４年３月にこれについての契約を締結した。調査は、当該地に東西３ｍ、南北30ｍの細長い調査区を設定して、平成４年４月20日から開始した。はじめに、重機を導入して調査区内の表土剥離を行う。その結果、当該地には旧水田の上に約50cmの厚さで盛土（第Ⅰ層）がなされていることが観察できた。そして、旧水田耕作土（第Ⅱ層）の厚さは約20cmで、その下層が遺構確認面である第Ⅲ層となっている。表土除去後は確認面での遺構精査を行い、４月22日には早くも調査区中央付近で両側に側溝を伴う東西道路跡を確認することができた。４月23日からは、この道路跡の側溝を土層の堆積状況を観察しながら掘り込み調査し、最終的には４時期の変遷があることを確認した。これと並行して、他の遺構の検出作業を行い掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝跡等を検出した。５月６日からは各遺構の一部掘り下げとともに図面作成を本格的に行い、特に道路跡については時期ごとに、掘り込みの後、写真撮影、平面図作成という手順を繰り返した。その調査の途中で２番目に新しい時期の側溝埋土中に10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰が含まれることを確認した。また他の遺構の年代については、主に出土遺物からみて、竪穴住居跡が古墳時代中期に属する以外は、おおよそ古代のものであると判断した。調査は、道路跡の調査終了後の５月25日に調査区全体の写真撮影を行い、その後各遺構の細かな検討を経て、６月３日には埋め戻しまでの全ての調査を終了した。

2 調 査 成 果

1. 検出遺構と遺物

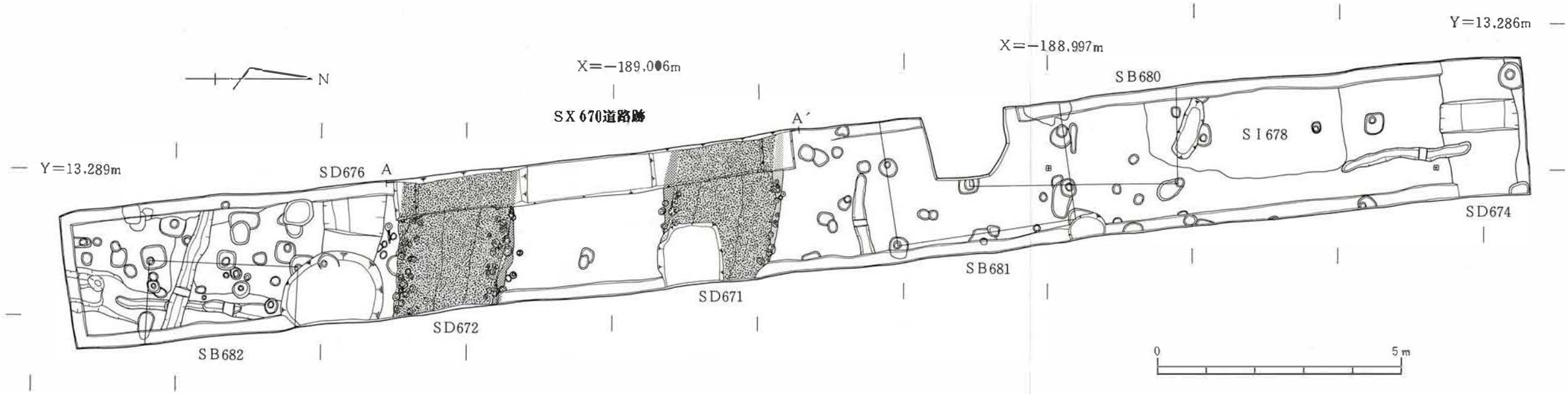
今回の調査で検出した遺構は、道路跡1条、掘立柱建物跡3棟、竪穴住居跡1軒、溝跡6条、その他柱穴を含むピット多数である。これらの遺構は、重複関係にあるもの以外は基本的に確認だけにとどめた。

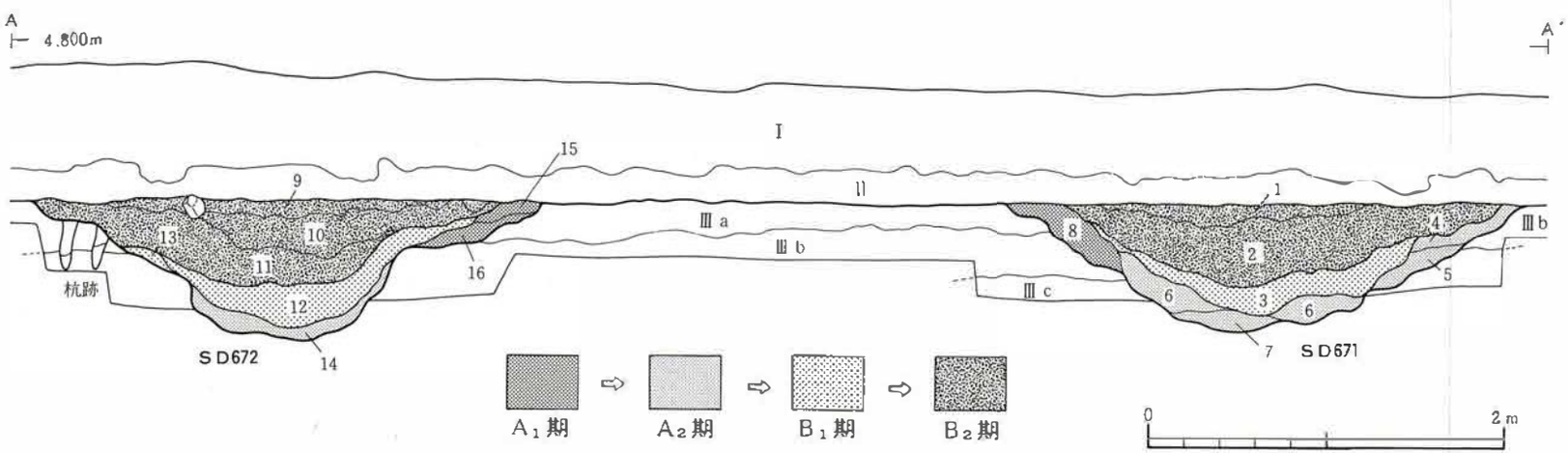
(1) 道 路 跡

SX670道路跡： 調査区中央付近で検出した東西道路跡である。両側に側溝を伴い、北側側溝がSD671、南側側溝がSD672である。ほぼ同一位置で4時期の変遷が認められ、古い順にA_1期→A_2期→B_1期→B_2期とした。路面幅は、一番新しいB_2期で 2.95～3.05m、両側溝の心心間距離は約5.4mを計る。 方向は、東で約4度南に偏しているが、検出範囲が非常に狭いこともあり、この数値は正確とはいいがたい。また、側溝両壁のほぼ上端沿いに径8～15cmの小さな杭跡が数多く検出された。これらの配置を検討したところ、少なくとも3時期の変遷をもつ杭列が存在したことが確認できた。さらに、明確な列としては組み合わないものも多くあることから、これより多くの杭列が存在したと思われる。性格としては、側溝との位置関係や検出状況から、道路跡側溝に伴う護岸用の杭列跡と考えられる。これに伴う、しがらみ等は検出されなかったが、杭間の側溝壁面が小さく階段状にくぼむ箇所も一部でみられたことから、あるいは板材等を並べて、それを杭によっておさえる構造であった可能性も考えられる。次に道路跡の変遷との関連については、各杭跡の埋土が地山土に非常に類似していたため、その確認がA_2期の掘り下げ後であったことから、どの杭列がどの時期に伴うのかは確認できなかった。しかし、両側溝とも路面側の一番外側の杭列のみは一番古いA_1期の掘り下げ後の確認であり、この時期に伴う可能性が強い。また、各杭跡の重複関係をみると、比較的側溝の中央寄りの杭跡の方が外側のものを切っている例が多い傾向にある。なお、路面では整地やバラス敷等の舗装は認められなかった。

SX670 A_1：一番古い時期であるため、両側溝とも路面側でその一部を確認したにすぎない。埋土は、いずれも黄灰色～暗灰黄色の砂質シルトである。遺物は、土師器の小破片がわずかに出土している。

SX670 A_2：この時期では、SD671A_2が底面から北壁にかけて、SD672A_2が底面付近のみ残存している。規模は、前者が下幅0.98～1.10m、確認面からの深さ約0.7m、 後者が下幅0.75～0.90m、確認面からの深さ約0.8mを計る。 断面形は、両側溝とも舟底状を呈し、壁はゆるやかに立ち上がるが傾斜は比較的急である。埋土は、底面付近ではいずれも地山土をブロック状に多く含む黒色粘土質シルトであり、わずかに残るSD671A_2の上層は黄灰色を呈する

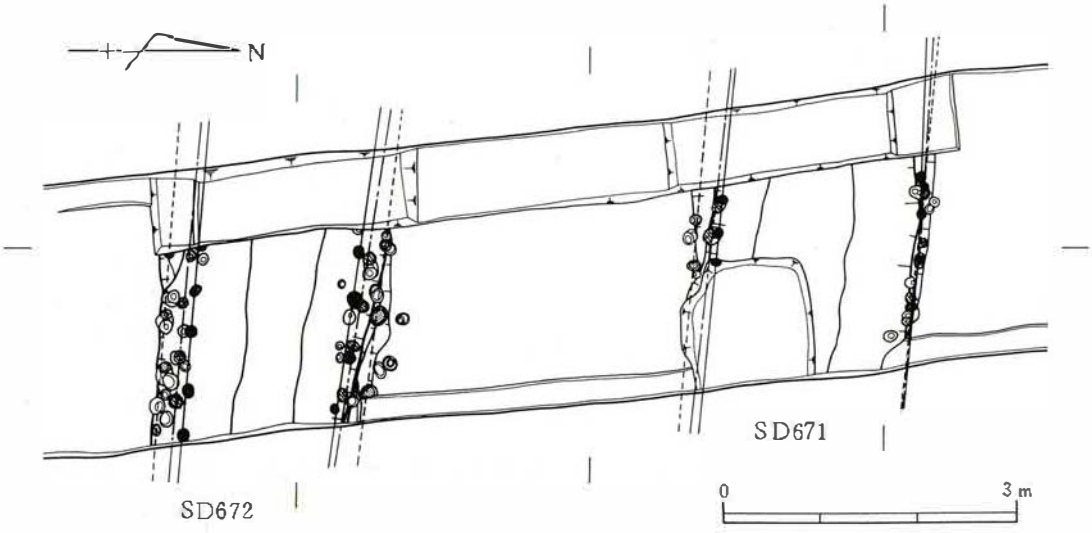




第１図　遺構全体図・道路跡断面図

土層註記

Ⅰ	2.5Y 5/3	黄褐色	シルト	表土・盛土
Ⅱ	10Y 4/1	灰　色	粘土質シルト	旧水田耕作土
SD671				
1	5Y 4/1	灰　色	シルト	黒色シルトを混入
2	5Y 4/1	灰　色	シルト	やや砂質
3	5Y 3/1	オリーブ黒色	粘土質シルト	灰白色火山灰を斑状に含む
4	2.5Y 4/1	黄灰色	シルト	地山土を斑状に多く含む
5	2.5Y 5/1	黄灰色	砂質シルト	地山土を斑状に含む
6	5Y 3/1	黒　色	粘土質シルト	地山土を多量に混入
7	5Y 3/1	黒　色	粘土質シルト	灰色砂を多量に混入
8	2.5Y 5/3	暗灰黄色	砂質シルト	地山土を斑状に含む
SD672				
9	5Y 3/1	オリーブ黒色	シルト	黒色シルトを混入
10	5Y 4/1	灰　色	シルト	黒色粘土質シルトを層状に含む
11	5Y 4/1	灰　色	シルト	やや砂質
12	2.5Y 4/1	黄灰色	粘土質シルト	灰白色火山灰を斑状に含む
13	2.5Y 5/1	黄灰色	砂質シルト	地山土を斑状に含む
14	10Y 3/1	黒　色	粘土質シルト	地山土を多量に混入
15	2.5Y 5/1	黄灰色	砂質シルト	地山土を斑状に含む
16	2.5Y 5/3	暗灰黄色	砂質シルト	地山土を斑状に含む
Ⅲa	10YR 5/2	灰黄褐色	砂	
Ⅲb	2.5Y 5/3	暗灰黄色	粘土質シルト	
Ⅲc	2.5Y 5/2	灰黄色	砂	

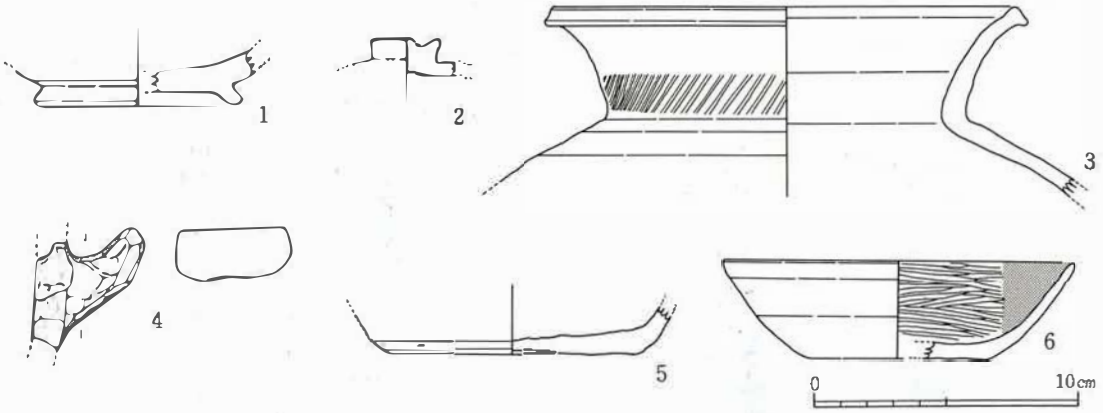


第2図　道路跡杭列配置図

シルト及び砂質シルトである。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕が出土しているが、すべて破片で出土量も少ない。

SX670B₁：両側溝とも、後続する時期のものに上部が壊されているため、底面から壁の中頃までの確認である。断面形は舟底状を呈し、壁はかなりゆるやかに立ち上がるため底面との境は明瞭ではない。規模はSD671B₁が下幅0.45～0.60m、確認面からの深さ約0.6m、SD672B₁が下幅0.40～0.60m、確認面からの深さ約0.7mを計る。埋土は、前者がオリーブ黒色粘土質シルト、後者が黄灰色粘土質シルトであるが、いずれも10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰を斑状に含んでいる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯（第3図5）・蓋（第3図2）・甕・瓶、赤焼き土器、転用硯（第3図1）が出土している。

SX670B2：一番新しい時期のもので、SD671B₂が現代の攪乱によって一部が壊されている以外は、他の遺構との重複関係はほとんどみられない。規模はSD671B₂が上幅2.00～2.05m、下幅0.85～0.95mで、確認面からの深さ約0.45m、SD672B₂が上幅1.90～2.02m、下幅0.65～0.80mで、確認面からの深さ約0.5mを計る。断面形は前時期のものに類似するが、特に後者では確認面の近くの壁でわずかな段を形成し、その上部で傾斜がさらにゆるやかになることから、風雨等の自然の作用で壁が削られ、上幅が広がっている可能性もある。埋土は、両側溝とも黒色シルトが混入した灰色シルトで、B₁期埋土の境付近では粘性をおび、酸化鉄斑が多くみられる。遺物は、土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯・蓋・甕（第3図3）・瓶、赤焼き土器杯・高台付杯が出土している。



(単位cm)

番号	種別	器種	遺構・層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	登録番号	写真図版
1	転用硯		SD671 B_1	ロクロナデ	ロクロナデ	底部		9.0		須恵器甕を転用	R－9	
2	須恵器	蓋	SD671 B_1	〃	〃					つまみ径(2.7)	R－10	
3	須恵器	壺	SD671 B_2	〃 平行叩き	〃		17.8				R－5	2－1
4	須恵器	把手	SD672 B_1	〃	〃						R－11	
5	須恵器	杯	SD672 B_1	〃 静止糸切り一回転ヘラケズリ	〃						R－8	
6	土師器	杯	SD679 B_1	〃 回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	1/4	(13.4)	6.8	3.8		R－7	2－2

第3図　道路跡側溝等出土遺物

（2）掘立柱建物跡

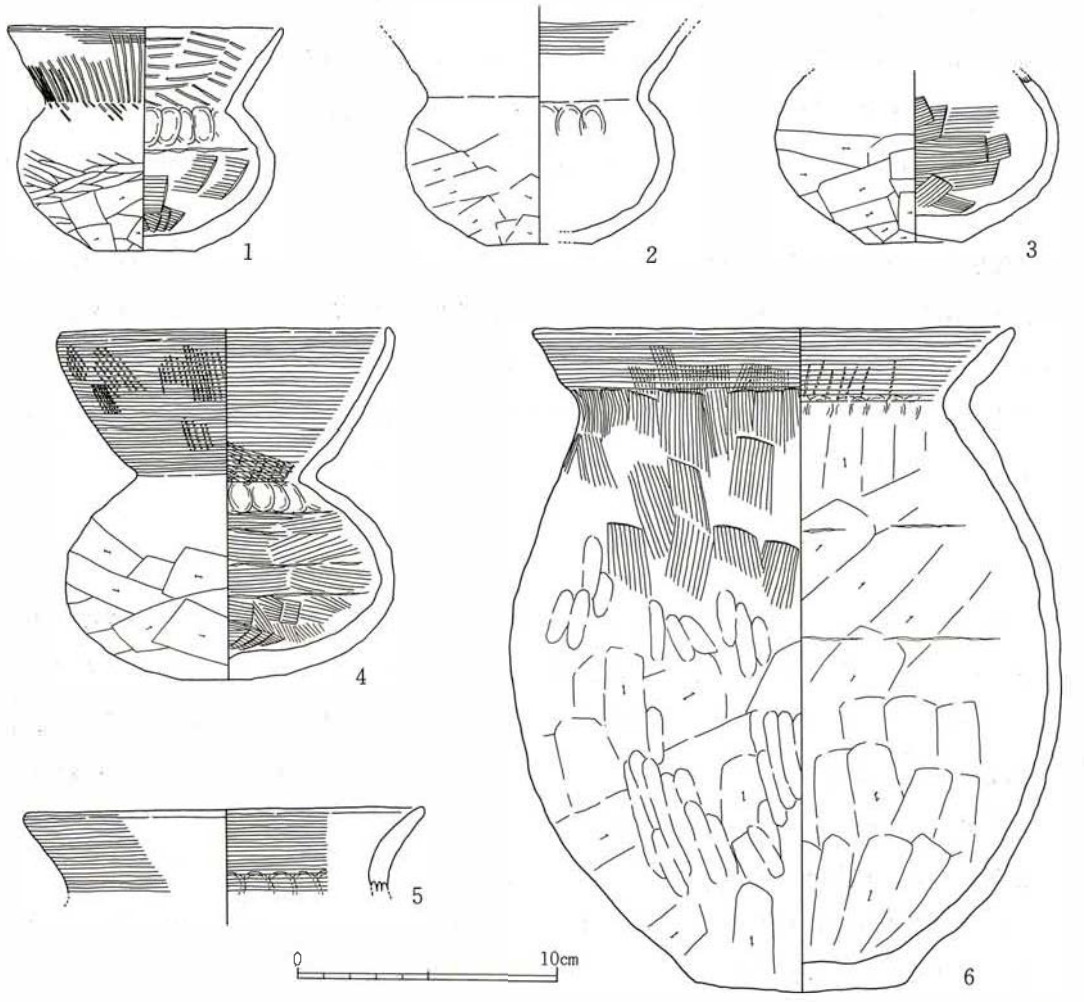
SB680：調査区北半部で検出した建物跡である。南北2間、東西は1間分まで確認でき、さらに西側の調査区外に延びる様相を示す。方向は、東側柱列でみると南北の座標軸にほぼ沿っている。柱間は、東側柱列が北から2.10m・2.10mで総長4.20m、北側柱列の1間分は1.42mである。柱穴は、ほぼ方形で一辺32～42cm、柱痕跡は径16～18cmを計る。遺物は、土師器と須恵器の破片がわずかに出土している。

SB681：調査区中央付近で検出した建物跡で、SB680と北側が重複するが、直接切り合いがないため新旧関係は不明である。南北2間、東西は1間分まで確認でき、さらに西側の調査区外に延びる様相を示す。方向は、東側柱列でみると北で8度西に偏している。柱間は、柱痕跡を確認していないものは柱穴のほぼ中央で計ると、東側柱列が北から1.70m・2.00mで総長3.70m、北側柱列と南側柱列の1間分はそれぞれ1.80mと1.65mである。柱穴は、ほぼ円形で径38～42cm、柱痕跡は明瞭に確認できる南側柱列の2つでみると径約15cmを計る。遺物は、土師器甕の破片がわずかに出土している。

SB682：調査区南側で検出した建物跡である。SD675・679と重複するが、直接切り合いがないため新旧関係は不明である。南北2間、東西は1間分まで確認でき、さらに東側の調査区外に延びる様相を示す。方向は、西側柱列でみると北で2度東に偏している。柱間は、西側柱列が北から1.50m・1.55mで総長3.05mである。柱穴は、ほぼ方形で一辺38～50cm、柱痕跡は径約16cmを計る。遺物は、土師器杯の破片がわずかに出土している。

（3）竪穴住居跡

S I678：調査区北側で検出した住居跡で、S B680と重複関係にあり、これより古い。規模は南北3.95mで、東西は西半部が調査区外にかかるため不明である。遺物は、土師器甕（第4図6）が出土している。掘り下げを行っていないため詳細は不明であるが、出土遺物から古墳時代中期に属すると考えられる。なお、本住居跡と直接関わりはないが、調査区内からは地山と考えた第Ⅲ層中から同時期の土師器（第4図1～4）が数点出土している。これについては、本住居跡や近接する他の調査地点で検出された竪穴住居跡の埋土が、地山土に極めて近く



（単位cm）

番号	種別	器種	遺構・層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	登録番号	写真図版
1	土師器	壺	第Ⅲ層	ヨコナデ、ハケメ、ヘラケズリ	ハケメ、ヘラナデ	3/4	(10.6)	4.0	8.6		R－3	
2	土師器	壺	第Ⅲ層	ヘラケズリ	ヨコナデ	1/2		4.0			R－13	2－5
3	土師器	壺	第Ⅲ層	ヘラケズリ	ヘラナデ	3/4		4.0		体部にススが付着	R－4	2－4
4	土師器	壺	第Ⅲ層	ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ヘラナデ	3/4	(13.0)		13.5		R－2	2－3
5	土師器	甕	S D676	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部	(15.5)				R－6	
6	土師器	甕	S I678	ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラケズリ		(18.5)	8.2	25.5		R－1	2－6

第4図　出土遺物

平面ではなかなか区別がつかなかったことから、これらの出土遺物も同様に何らかの遺構に伴う可能性や、もしくは第Ⅲ層を包含層とみなしてそれに含まれる遺物であるとも考えられる。

（4）溝　跡

溝跡は6条検出されているが、SD674・676を除けば、他は幅25～35cm、深さ10cm程の小溝跡である。

SD674：調査区北端で検出した東西方向に延びる溝跡である。SD673や柱穴と重複関係にあり、これらより古い。規模は、上幅1.32～1.45m、下幅0.90～0.95m、深さ約0.45mを計る。断面形は逆台形を呈する。埋土は3層に分けられ、1層が黒褐色シルト、2層が地山土をブロック状に多量に含む黒褐色粘土質シルト、3層が灰黄褐色砂である。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・甕のほか羽口が出土している。このうち土師器については、すべて製作の際にロクロを使用しないものである。時代は出土遺物からみて、大きく奈良時代に属すると考えられる。

SD676：調査区南半部で検出した東西方向に延びる溝跡である。規模は、上幅1.15～1.28m、下幅0.28～0.32m、深さ約0.3mを計る。断面形は、壁の立ち上がりがゆるやかなV字状を呈する。埋土は2層に分けられ、いずれも黒褐色シルトであるが、下層には黄褐色砂質シルト等が含まれる。遺物は、土師器杯・甕（第4図5）、須恵器甕が出土しているが、出土量が少ないため、これによって時代等を特定することはできない。

3　小　　結

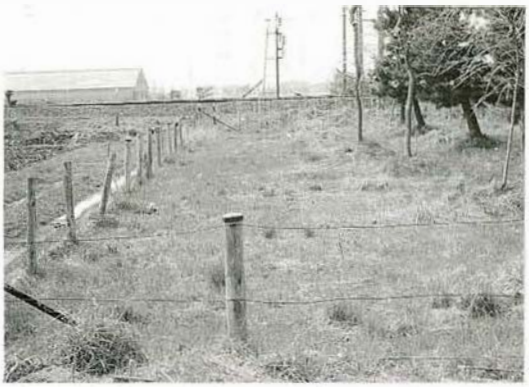
1　本調査は、山王千刈田遺跡で発見された『国守の館』の敷地の北辺を画する道路跡の検出を目的としたものであったが、その道路推定ライン上で東西道路跡（SX670）を確認した。

2　道路跡は、両側に側溝を伴い、路幅は約3mである。ほぼ同位置で4時期（A_1期→A_2期→B_1期→B_2期）の変遷をもつ。また、B_1期の埋土には10世紀前半に降下したとされる灰白色火山灰が含まれることから、道路跡の年代も9世紀～10世紀中頃の時期が考えられる。なお、この年代は出土遺物の内容からみても矛盾しない。

3　道路跡側溝の両壁上端沿いに、3時期以上の変遷をもつ小杭列を検出した。性格としては道路側溝の護岸用施設と考えられる。

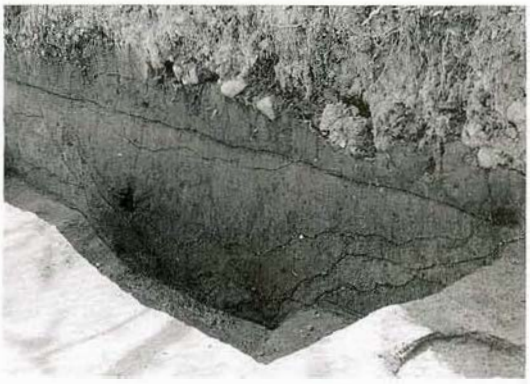
4　道路跡の年代、変遷、出土遺物等は、これまで他の調査において検出されている道路跡の内容とほぼ一致する。

5　道路跡の北側と南側では、掘立柱建物跡3棟をはじめ数多くの柱穴を確認した。調査区の幅が狭く、建物の規模までは把握できなかったが、道路跡と方向を同じにするもの（SB680・682）も確認していることから、道路に面して建物が建てられていたことが考えられる。

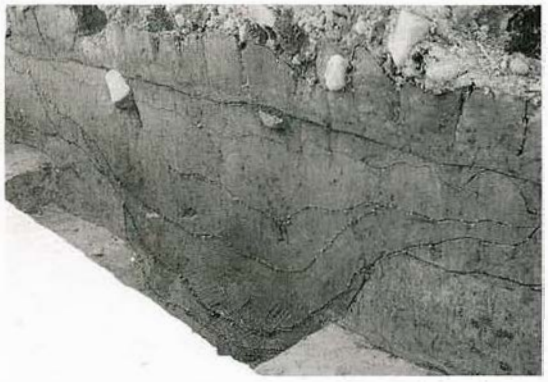


調査前状況（北より）

ＳＸ670道路跡検出状況（北より）

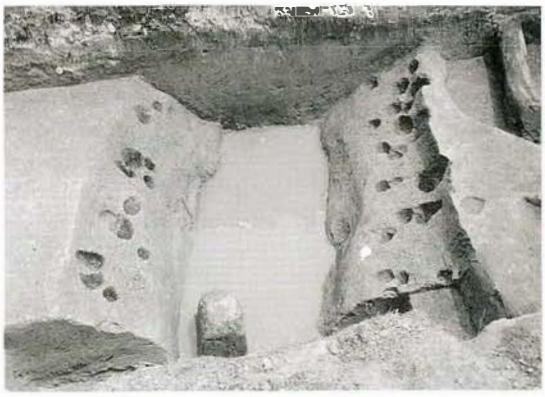


ＳＤ671側溝土層堆積状況



ＳＤ672側溝土層堆積状況

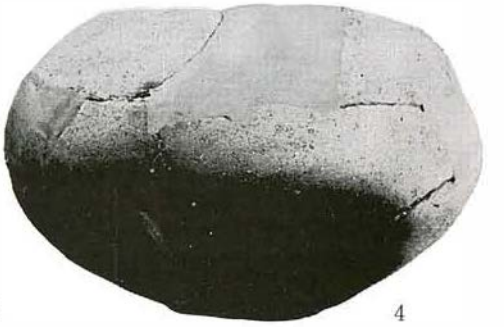
ＳＤ671側溝（東より）



ＳＤ672側溝（西より）

ＳＸ670道路跡（北より）

調査区全景（北より）



1	須恵器　甕	SD671 B_2	第3図3
2	土師器　杯	SD679	〃　6
3	〃　壺	第Ⅲ層	第4図4
4	〃　〃	〃	〃　3
5	〃　〃	〃	〃　2
6	〃　甕	SI678	〃　6
7	石製模造品	第Ⅰ層	
8	〃	〃	

出　土　遺　物

Ⅴ　山王遺跡第20次調査

1　調査方法と経過

今回の発掘調査は、南北道路跡を検出するのが主目的であるため、東西に長い調査区（4m×32m）を設定した。調査は平成4年6月10日より、人力による表土(現代の水田耕作土）剝離より開始した。遺構検出作業は東側より西側へ順次進めていった。調査区東側付近では柱穴、土坑、溝等を検出し、プラン検討後、一段掘り下げを行う。調査区中央付近では、図上で予想していた地点とほぼ同位置で南北道路跡を検出した。道路跡は両側に側溝を伴い、路面幅約3mを計った。側溝の平面プランの観察結果では西側で4時期、東側では3時期の変遷が認められた（6月15日）。6月17日には調査区内に実測図作成のため、国家座標を使用した簡易遣り方を設定し、調査区東側の平面図作成を開始する。一方、並行して調査区西側の遺構検出作業も行うが、東側に比べて遺構が濃密に分布していた。遺構は柱穴、溝、土坑が複雑に重複しており、切り合いの確認に難行をきわめた。しかし、溝のうち小規模なものについては南北方向に比較的等間隔に並ぶことから小溝群（畑跡）ではないかと考えられた。また柱穴については一辺1mを計る大規模なものもみられた。道路跡については、調査区北壁付近の断ち割りを行い側溝の土層堆積状況を観察したところ、基本的に平面で確認した変遷どおりであることを追認した。調査区西半では7月3日頃まで実測図を作成しながら柱穴の組み合わせを検討する。その結果、総数7棟の建物跡を検出した。建物跡の方向は大半が座標北にほぼ沿うものであるが、SB697のみは大きく東に振れていた。 また、小溝群と建物跡の新旧は、小溝群が古いことが判明した。なお、古代の遺構検出面となっている第Ⅱ層中に、ランダムな状況で古墳時代中期の土師器が包含されていた。7月6日には調査区内の清掃を行い全景・遺構個別の写真撮影を行った。7月7日、現場からの器材の撤収を行い、すべての調査を終了した。

2　調　査　成　果

1.　基本層位

本調査区の基本層位は、第Ⅰ層が現代の水田耕作土（層厚20cm前後）、その下層を第Ⅱ層(2.5Y8／3淡黄色シルト)とした。第Ⅱ層上面が古代の遺構検出面である。調査当初、第Ⅱ層は無遺物層の地山であろうと考えていたが、調査時にランダムな状況で古代時代中期の土師器が出土したため、遺物包含層と判明した。

2. 検出遺構と遺物

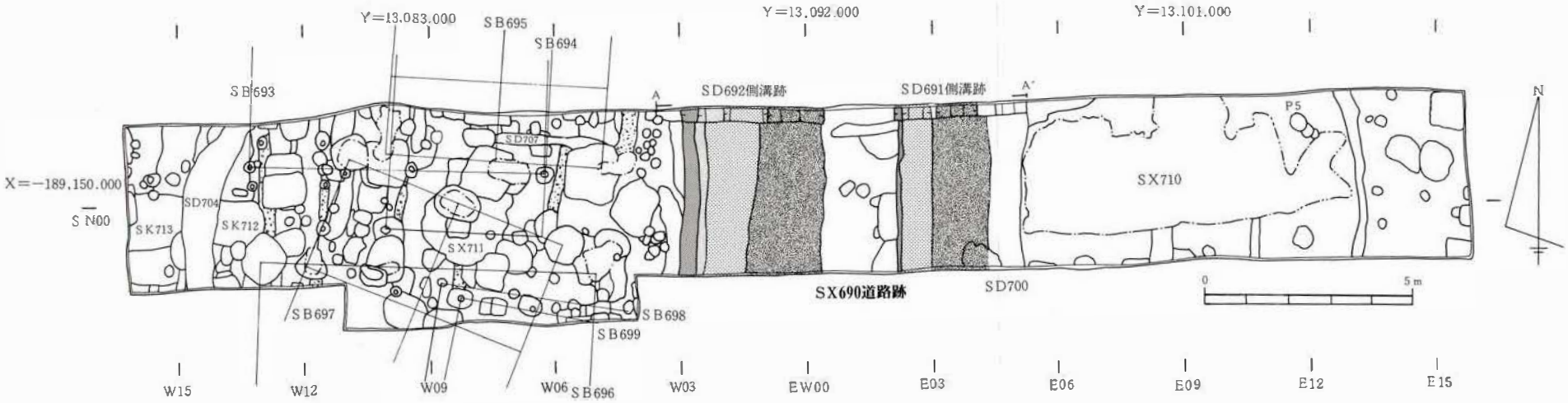
(1) 道 路 跡

ＳＸ690道路跡：調査区のほぼ中央付近で検出した南北道路跡である。溝跡、土坑などと重複しており、これらより新しい。長さは約４ｍまで検出した。東西両側に素掘りの側溝（ＳＤ691・692）をもち、方向は座標北にほぼ沿う。路面には整地、バラス敷等の施設は認められなかった。側溝は東側側溝（ＳＤ691）で３時期（A_1→B_1→B_2）、西側側溝（ＳＤ692）で４時期（A_1→A_2→B_1→B_2）の変遷をもち、西から東へと位置をずらして作り替えていた。東西両側溝の溝心々間距離（B_2期）は約4.1ｍ、検出面での路面幅は約2.6ｍを計る。側溝の規模は、東側溝で幅1.3～1.4ｍ、深さ0.45ｍ、西側溝で幅1.5～1.7ｍ、深さ0.45ｍを計る。埋土はA_1期が褐灰色シルト、A_2期がにぶい黄色シルト、B_1期が褐灰色シルトで灰白色火山灰のブロックを含む。B_2期は上層が黒褐色シルト質粘土、下層が褐灰色シルトである。遺物は東西両側溝のものをA_1～B_2期にまとめて以下に記述する。A_1期では土師器杯・甕の破片が出土している。杯・甕ともロクロ調整のものと非ロクロ調整のもの（第３図８）とがある。A_2期は土師器杯の破片で非ロクロ調整である。B_1期は土師器杯・甕、須恵器杯・甕（第４図２）・瓶、赤焼き土器杯、丸瓦・平瓦の破片が出土している。土師器杯（第３図９）・甕（第４図１）はいずれもロクロ調整で、前者の底部は回転糸切り無調整である。B_2期は土師器杯・高台付杯・甕、須恵器杯（第３図10）・甕・長頸瓶、赤焼き土器杯・丸瓦の破片が出土している。土師器はいずれもロクロ調整である。

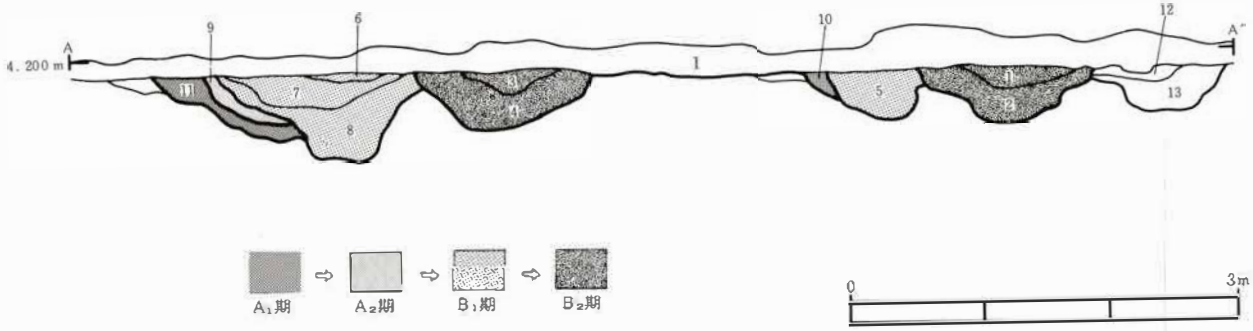
(2) 掘立柱建物跡

ＳＢ693：調査区の西半部で検出した建物跡である。東西に並ぶ４間分の柱穴から推定したもので、調査区北側へと延びている。重複関係からＳＢ695より古く、ＳＤ709小溝群より新しい。方向は南側柱列でみると座標東にほぼ沿う。柱間は、南側柱列で西より1.8ｍ・2.0ｍ・２間分で3.2ｍ、総長7.0ｍを計る。柱穴は30×40cmの不整方形を呈し、柱痕跡は10～20cmの円形である。埋土は焼土・木炭粒を含む褐灰色シルトである。遺物は土師器杯・甕（ロクロ調整）の破片が出土している。

ＳＢ694：調査区の西半部で検出した東西２間・南北２間以上の建物跡である。重複関係からＳＢ696・697、ＳＤ707より古く、ＳＢ695、ＳＤ709小溝群、ＳＸ711より新しい。方向は南側柱列でＥ—2°—Ｓである。柱痕跡と柱抜取穴は各１ケ所ずつで確認している。柱間は南側柱列で総長約3.7ｍを計る。柱穴は一辺50～70cmの方形を呈し、柱痕跡は径20cmの円形である。埋土は木炭粒、第Ⅱ層土をブロック状に含む褐灰色シルトである。遺物は土師器杯・甕（非ロクロ調整）の破片が出土している。



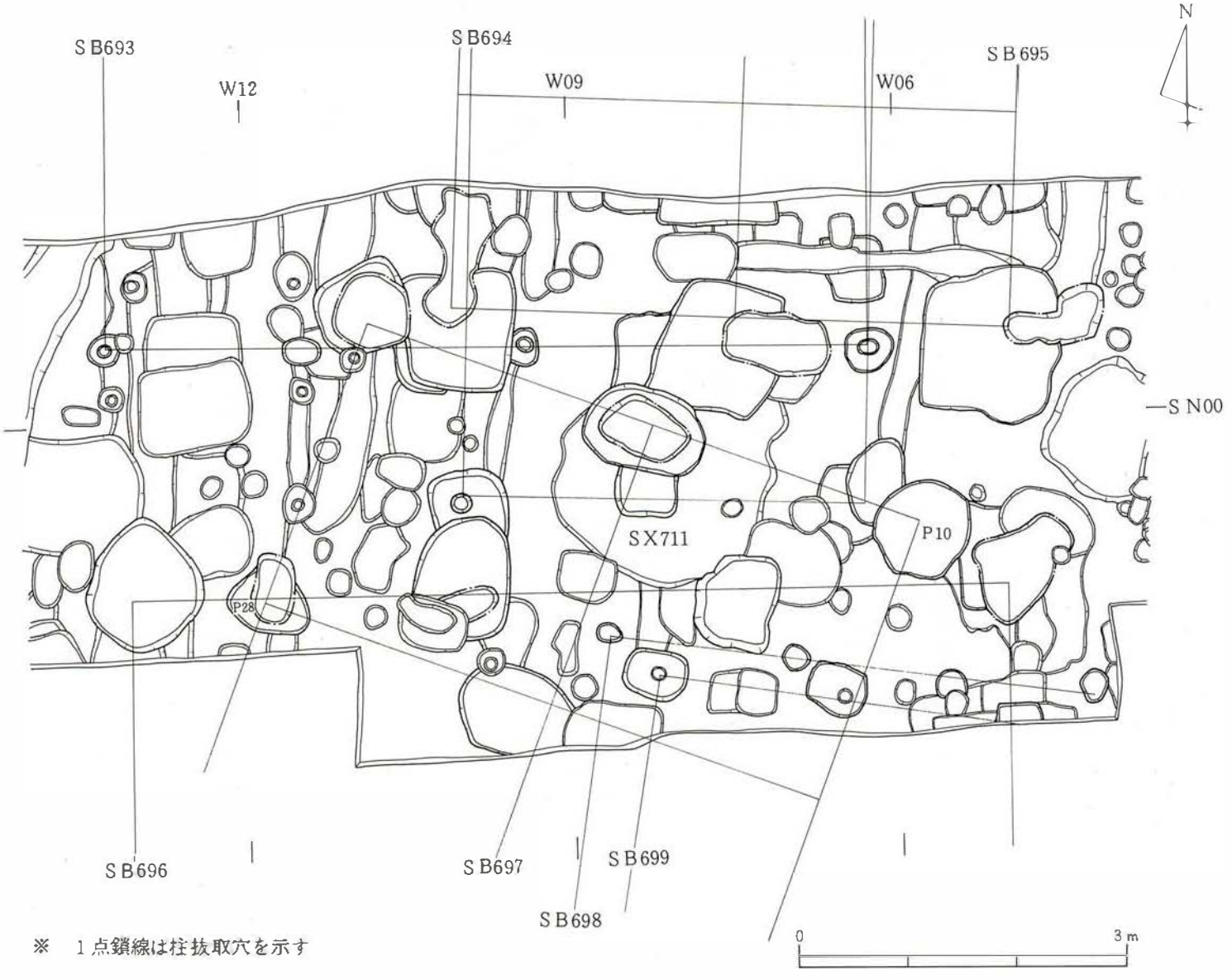
※ ▨ はSD709小溝群



土層註記

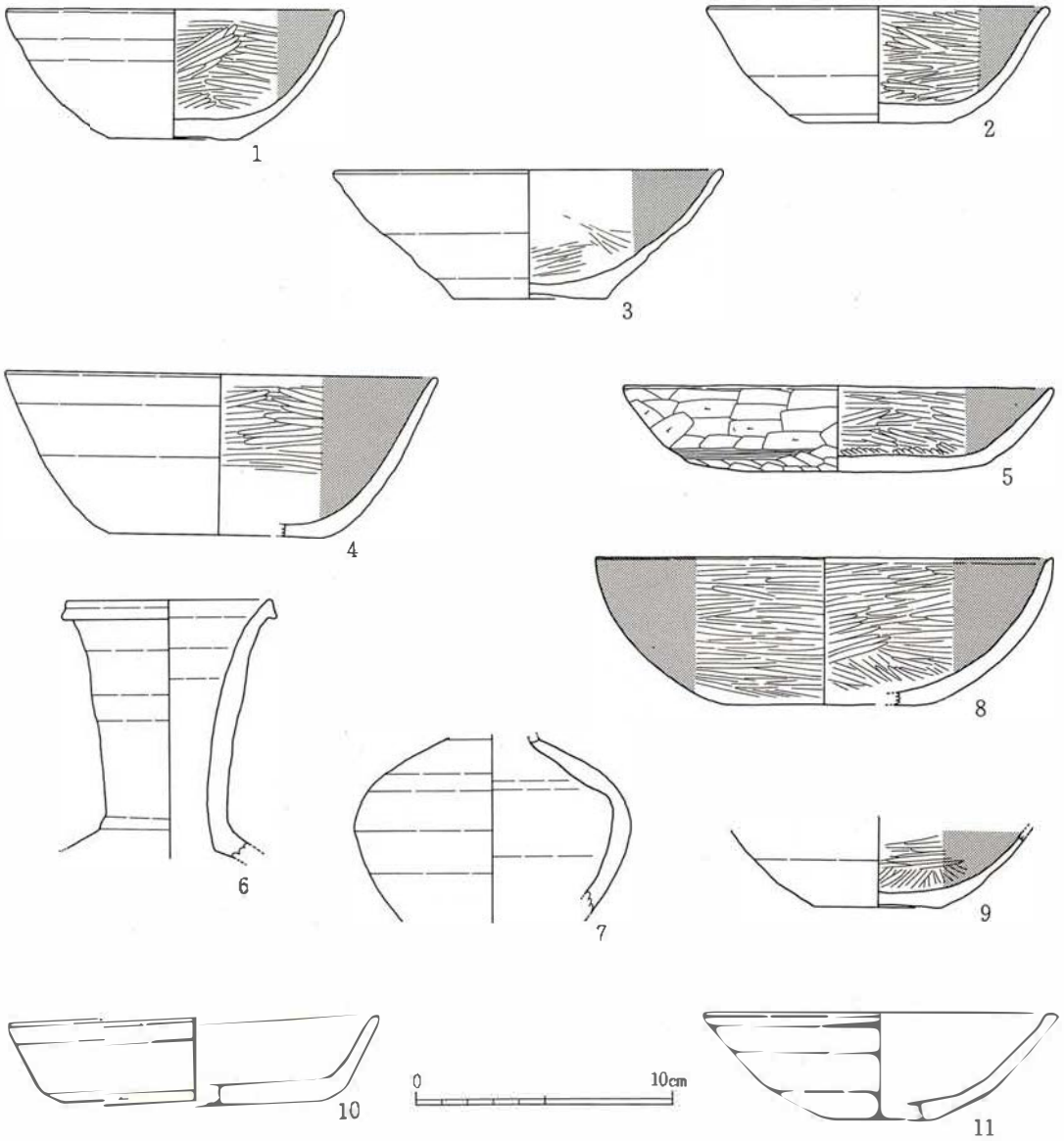
1	7.5YR5/4	黒褐色	シルト質粘土	(SD691 B₂期)
2	7.5YR5/4	褐灰色	シルト 均質	(SD691B₂期)
3	7.5YR3/1	黒褐色	シルト質粘土	(SD692B₂期)
4	7.5YR5/4	褐灰色	シルト 均質	(SD692B₂期)
5	2.5Y 5/1	黄灰色	シルト 灰白色火山灰のブロックを含む	(SD691B₁期)
6	10YR5/4	褐灰色	シルト質粘土	(SD692B₁期)
7	2.5Y 5/4	黄灰色	シルト 下層に灰白色火山灰が層状に入る	(SD692B₁期)
8	7.5YR5/4	褐灰色	シルト 均質	(SD692B₁期)
9	2.5Y 5/3	にぶい黄色	シルト 第Ⅱ層土ブロックを多く含む	(SD692A₂期)
10	7.5YR5/4	褐灰色	シルト 粗砂を含む	(SD691A₁期)
11	〃	〃	〃	(SD692A₁期)
12	7.5YR5/3	暗褐色	シルト 均質	(SD700埋土)
13	7.5YR5/4	〃	〃	(SD700埋土)

第1図　遺構全体図・道路側溝断面図



※　1点鎖線は柱抜取穴を示す

第2図　調査区西半部遺構平面図



（単位cm）

番号	種別	器種	遺構・層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	整理番号	ラバ図版
1	土師器	杯	SB695埋土	ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	¼	(13.2)	5.0	5.0		R—1	2—1
2	土師器	杯	SB697埋土	ロクロナデ、回転ヘラケズリ 底部：回転ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	⅓	(13.4)	5.6	(4.5)		R—2	2—2
3	土師器	杯	SB697埋土	ロクロナデ、ヨコナデ	ヘラミガキ、黒色処理	⅓	(15.2)	(3.0)	5.0		R—18	2—3
4	土師器	杯	SB697P28埋土	ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	½	(16.9)	(8.5)	(6.2)		R—5	2—4
5	土師器	杯	SB697放穴埋土	ヘラケズリ、底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	½	(16.9)		3.3		R—3	2—5
6	須恵器	長頸壺	SB697P1C埋土	ロクロナデ	ロクロナデ		(8.4)				R—4	2—7
7	須恵器	小型壺	SB697P28埋土	ロクロナデ	ロクロナデ						R—29	
8	土師器	杯	SD691A埋土	ヘラミガキ、黒色処理 底部：ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	⅓	(17.9)	(7.8)	(5.7)		R—6	
9	土師器	杯	SD691B埋土	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理			5.0			R—13	
10	須恵器	杯	SD692B3埋土	ロクロナデ、回転ヘラケズリ 底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ		(14.5)	(10.2)	(3.2)		R—7	
11	須恵器	杯	SD704埋土	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	⅓	(13.8)	(4.2)	(4.1)		R—8	

第3図　出土遺物実測図　(1)

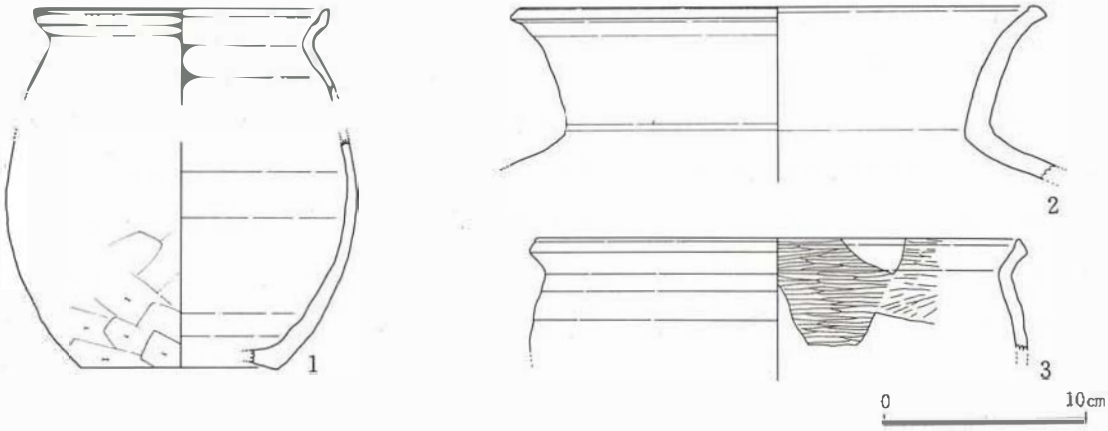
ＳＢ695： 調査区の西半部で検出した東西２間・南北１間以上の総柱建物跡である。重複関係からＳＢ693・694、ＳＤ703よりも古く、ＳＢ697、ＳＤ707より新しい。建物跡はほぼ同位置で１度建て替えられており（ＳＢ695Ａ→ＳＢ695Ｂ）、いずれのＢ期柱穴からも柱抜取穴を確認している。方向は柱抜取穴の位置より想定するとＥ―4°―Ｓである。柱間は南側柱列で総長約5.1ｍを計る。柱穴は一辺1.2～1.4ｍの方形を呈する。埋土は褐灰色シルトで、柱抜取穴には木炭片、焼土ブロックが多量に含まれている。遺物は土師器杯（第３図１）・甕、須恵器杯・甕の破片が出土している。土師器杯はロクロ調整で、甕はロクロ調整と非ロクロ調整のものとがある。須恵器杯の底部には、回転糸切り無調整のものと回転ヘラ切り→ナデ調整のものとがある。

ＳＢ696： 調査区の西半部で検出した建物跡である。東西に並ぶ３間分の柱穴から推定したもので、調査区南側へと延びている。重複関係からＳＢ697より古く、ＳＢ694、ＳＤ709、ＳＸ711より新しい。ＳＢ698・699とは直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。２個の柱穴では柱抜取穴が確認された。方向は推定で座標東にほぼ沿う。規模は総長約８ｍを計る。柱穴は0.8～1.2ｍの不整方形を呈する。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・瓶・甕、円盤状土製品（第６図12）、鉄製品（第６図２）が出土している。土師器杯にはロクロ調整と非ロクロ調整のものとがある。ロクロ調整の杯は底部が回転糸切り無調整である。

ＳＢ697： 調査区の西半部で検出した東西２間・南北１間以上の総柱建物跡である。重複関係からＰ17より古く、ＳＢ693・694・695・696、ＳＤ706、ＳＸ711より新しい。ＳＢ698・699とは直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。３個の柱穴では柱抜取穴が確認された。方向は推定でＥ―21°―Ｓとなる。規模は北側柱列で総長約5.4ｍを計る。柱穴は0.8×1.1ｍの不整方形を呈する。埋土は木炭粒・第Ⅱ層土をブロック状に含む褐灰色シルトである。遺物は土師器杯（第３図２～５）・甕、須恵器杯・瓶（第３図６～７）、丸瓦が出土している。土師器杯にはロクロ調整のものと非ロクロ調整のものとがあり、前者の底部は回転糸切り無調整である。

ＳＢ698： 調査区の西半部で検出した建物跡である。東西に並ぶ３間分の柱穴から推定したもので、調査区南・東側へと延びる可能性がある。重複関係からピットより古いものと新しいものとがある。ＳＢ696・697・699とは直接切り合いがないため新旧関係は不明である。方向は推定でＥ―8°―Ｓとなる。規模は北側柱列で長さ約 4.5ｍを計る。柱穴は径20～30cmの不整方形を呈する。埋土は木炭粒・焼土粒を含む褐灰色シルトである。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、平瓦の破片が出土している。

ＳＢ699： 調査区の西半部で検出した建物跡である。東西に並ぶ２間分の柱穴から推定したもので、調査区南・東側へと延びる可能性がある。ＳＢ696・697・698と重複関係にあるが、



(単位cm)

番号	種別	器種	遺構・層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	登録番号	写真図版
1	土師器	甕	SD691B,埋土	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ		(14.8)	10.0			R—21	
2	須恵器	甕	SD691B,埋土	ロクロナデ	ロクロナデ		(26.8)				R—16	2—11
3	土師器	甕	SK713埋土	ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色処理		(24.8)				R—14	

第4図　出土遺物実測図（2）

直接の切り合いがないため新旧関係は不明である。方向は推定でE—9°—Sとなる。規模は北側柱列で長さ約3.4mを計る。柱穴は50×60cmの方形を呈し、柱痕跡は径15cmの円形である。埋土は灰黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

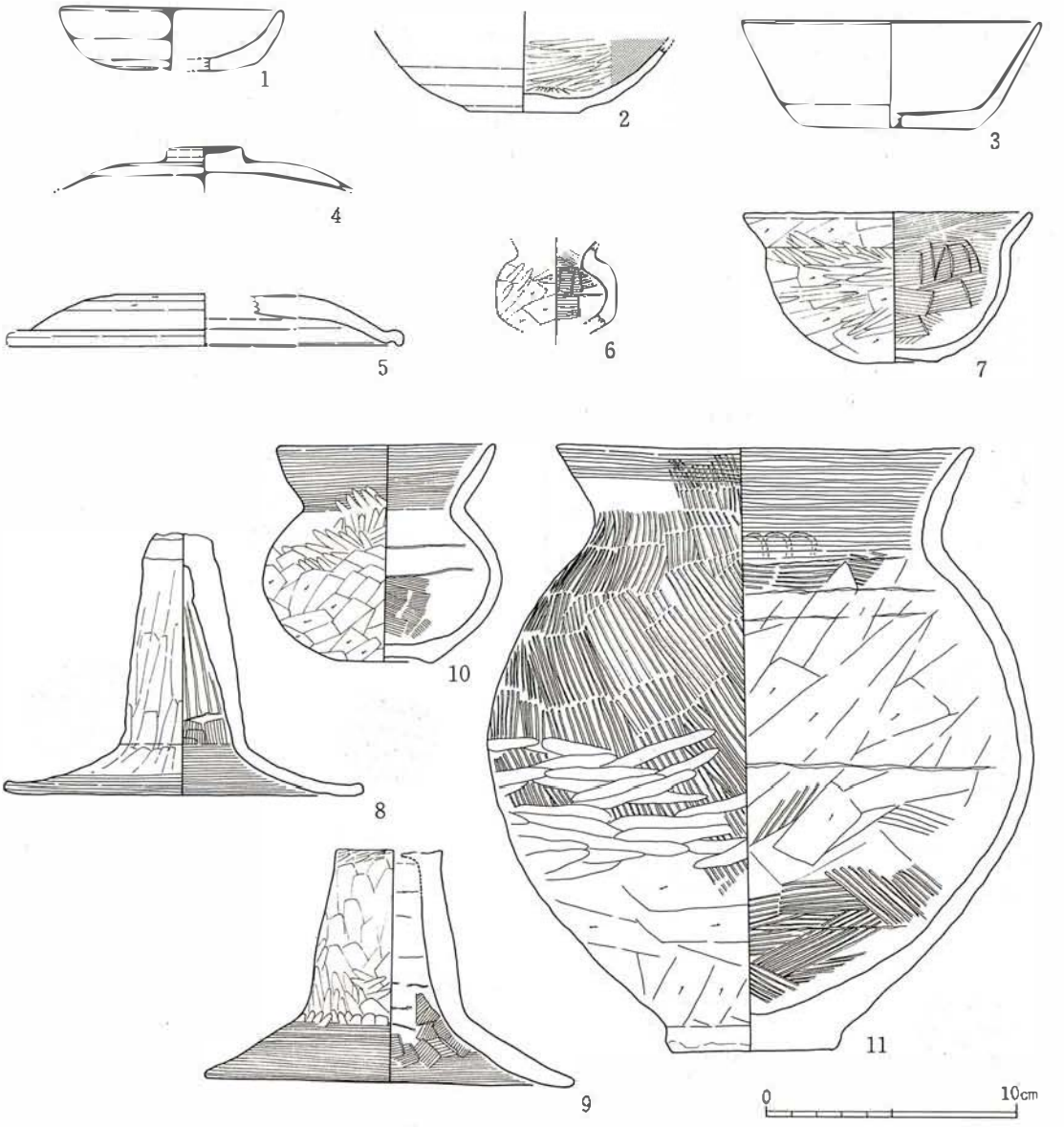
（3）溝　跡

溝跡は総数17条以上検出している。ここでは主要なものについて記述する。

SD700：調査区のほぼ中央付近SX690道路跡の東側に隣接して検出した南北溝である。重複関係から道路東側溝SD691B_2期より古い。確認できる長さは4mで、幅1m以上はあったとみられる。深さは35cmを計る。埋土は灰褐色シルトで、道路東側溝SD691A_1期の埋土と近似している。遺物は出土していない。

SD704：調査区の西端付近で検出したやや東に蛇行する南北溝である。重複関係からSD705、SK712・713より新しい。確認できる長さは4mで、幅0.6～1.0mを計る。埋土中には比較的多く灰白色火山灰のブロックを含んでいる。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯（第3図11）・瓶・甕、赤焼き土器杯、鉄製品（第6図3～6）が出土している。土師器はいずれもロクロ調整、須恵器杯の底部は回転糸切り無調整である。

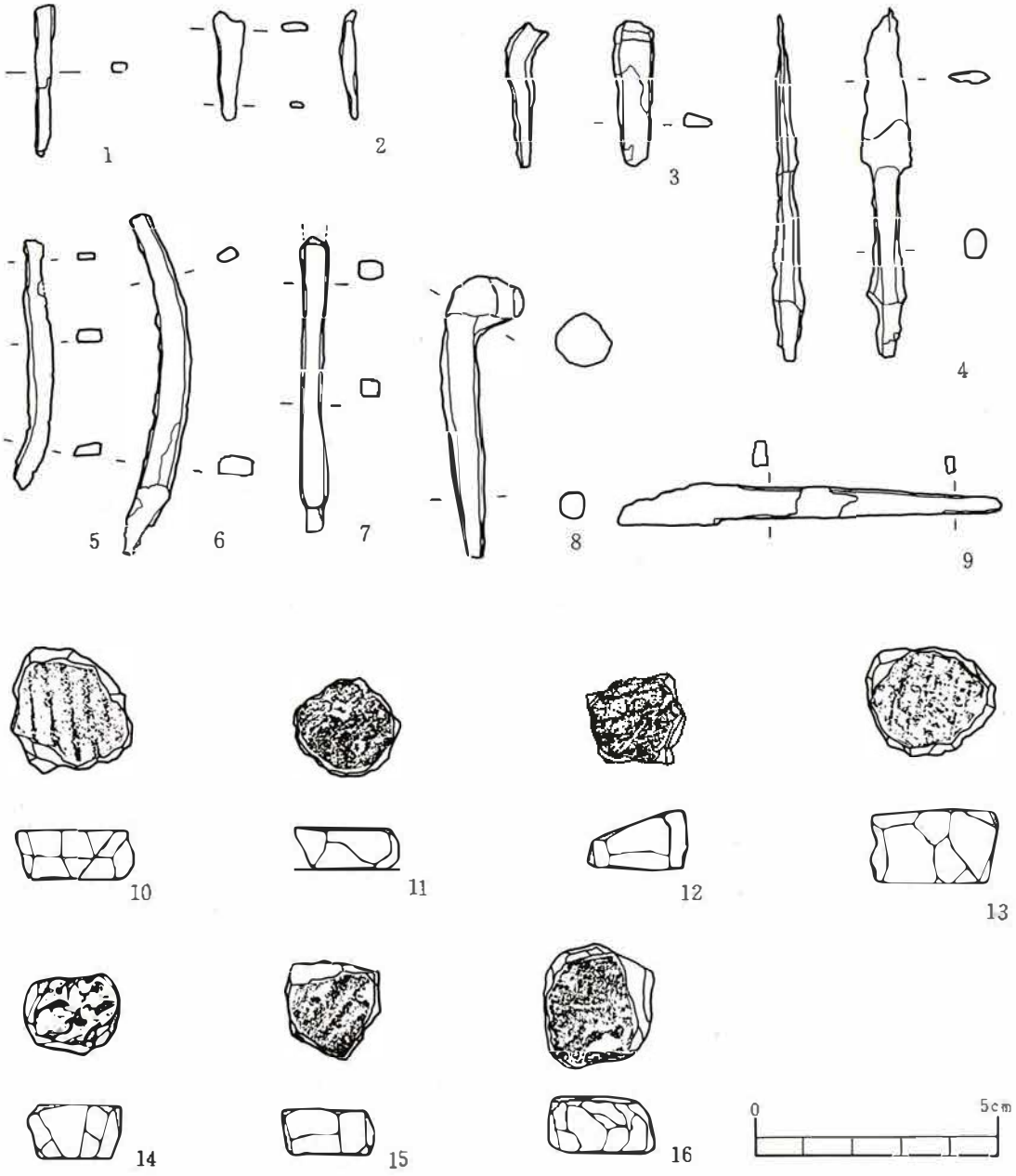
SD709（小溝群）：調査区の西半部ほぼ全域で検出した。重複関係のあるすべての遺構より古い。本小溝群は細長くて浅い溝が数本、南北方向に平行して並ぶものである。規模は幅0.2～0.5m、深さ0.1mを計る。溝と溝の間隔は約1.5mである。埋土は川層起源の粒子を含む



(単位cm)

番号	種別	器種	遺構・層位	外面調整	内面調整	残存	口径	底径	器高	備考	登録番号	写真図版
1	カワラケ	小皿	第Ⅰ層	ロクロナデ、底部：回転糸切り?	ロクロナデ	½	(9.1)	(5.3)	2.5		R—30	
2	土師器	杯	〃	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	½		(4.4)			R—27	
3	須恵器	杯	〃	ロクロナデ、底部：回転ヘラ切り	ロクロナデ	½	(12.1)	(7.0)	4.4		R—28	2—9
4	須恵器	蓋	〃	ロクロナデ	ロクロナデ						R—11	2—8
5	須恵器	蓋	〃	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ロクロナデ	½	(16.1)				R—15	2—10
6	土師器	ミニチュア壺	〃	ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヘラナデ、ナデ						R—31	
7	土師器	杯	〃	ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヘラナデ、ナデ	¼	(11.5)	(3.2)	6.0		R—26	
8	土師器	高杯	第Ⅱ層	ヘラケズリ、ヘラミガキ、ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ			(14.5)			R—25	
9	土師器	高杯	〃	ヘラケズリ、ヘラミガキ、ヨコナデ	ヘラナデ、ヨコナデ			(15.0)			R—24	
10	土師器	壺	〃	ヘラケズリ、ヘラミガキ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	底部完形	8.9	4.0	8.7		R—23	
11	土師器	甕	〃	ハケメ、ヨコナデ ヘラケズリ、ヘラミガキ	ヘラケズリ、ハケメ ヨコナデ		(16.8)	(6.8)	24.0		R—12	

第5図　出土遺物実測図 (3)



（単位cm）

番号	種別	遺構・層位	細考	整理番号	写真図版	番号	種別	遺構・層位	細考	整理番号	写真図版
1	不明鉄製品	SD692 B1埋土		R－10		10	円盤状土製品	第Ⅰ層	須恵器 甕 タタキ	R－41	
2	不明鉄製品	SB696埋土		R－12		11	円盤状土製品	SD692 B3埋土	須恵器 甕 ヘラケズリ	R－39	
3	鉄 剣？	SD704埋土		R－3	4－13	12	円盤状土製品	SB696埋土	須恵器 甕	R－46	
4	鉄 鏃	SD704埋土		R－4	4－14	13	円盤状土製品	第Ⅰ層	須恵器 甕 タタキ	R－43	
5	不明鉄製品	SD704埋土		R－5	4－15	14	円盤状土製品	〃	須恵器 甕 タタキ	R－44	
6	不明鉄製品	SD704埋土		R－6	4－16	15	円盤状土製品	〃	須恵器 甕	R－47	
7	鉄 鏃	SX710埋土		R－8	4－17	16	円盤状土製品	〃	須恵器 甕ロクロナデ	R－42	
8	鉄 釘	第Ⅰ層		R－2	4－18						
9	刀 子	P－5 埋土	柄の部分に木質が残存	R－9	4－19						

第6図　出土遺物実測図 (4)

褐灰色シルトの単層である。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯の破片がわずかに出土している。

（4）その他の遺構

ＳＸ710： 調査区の東半部で検出した不整形の遺構である。重複関係から溝より新しい。規模は東西辺7.7m、南北辺３m以上で、深さ0.2mを計る。底面は凹凸が激しい。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、瓦の破片と鉄鏃（第６図７）が出土している。

ＳＸ711： 調査区の西半部ほぼ中央で検出した遺構である。重複関係からＳＢ694・695・696・697より古い。形態は不整円形を呈し、径約２mを計る。遺物は土師器甕（非ロクロ調整）の破片が出土している。

（5）基本層出土の遺物

この他に基本層の第Ⅰ・Ⅱ層より遺物が出土している。第Ⅰ層では古墳時代・古代の土師器、須恵器・赤焼き土器・丸瓦・平瓦の他に中世以降のカワラケ（小皿）、近世以降の陶磁器がみられる。第Ⅱ層からは古墳時代中期（南小泉式）の土師器（高杯・壺・甕）が出土している。この古墳時代の土師器を包含する第Ⅱ層は平面での層相、遺物の出土状況からみると河川（註１）あるいは自然堤防（註２）南側の落ち際に形成された土層と考えられる。

3　小　　結

今回の調査は『国守の館』の敷地東辺を区画する施設（道路）の確認を目的として実施した。以下、簡略に調査成果をまとめてみることにする。

1　図上で推定したライン上に側溝を伴う路幅約３mの南北道路跡を確認した。

2　この道路跡の側溝は４時期の変遷をもち（古い順にA_1→A_2→B_1→B_2期）、西から東へと位置をずらして作り替えていることが判明した。

3　道路跡の年代については、B_1期に10世紀前半に降下した灰白色火山灰を含んでいることや出土した遺物の特徴より、これまで多賀城周辺で検出される道路跡と同様な９世紀～10世紀中頃の年代が考えられる。

4　道路跡の東側に隣接して検出したＳＤ700は、埋土の類似性から道路側溝ＳＤ691A_1期に機能していたもので、敷地内を区画する溝と考えられる。

5　道路跡をはさんで西側と東側では異なる遺構の分布状況が認められた。東側は比較的希薄であるのに対し、西側では濃密に分布していた。西側では掘立柱建物跡７棟、小溝群（畑跡）他多数の遺構を検出した。このうち特に注目すべきは、１m四方の規模の柱穴をもつ倉庫と

考えられる建物跡（ＳＢ695・697）である。道路西側に近接して建てられており、敷地内の建物配置を知るうえで重要な資料となろう。

6　調査区西側の主要な遺構の重複関係を整理すると以下のようになる。

ＳＤ709→ＳＸ711→ＳＢ694→ＳＢ696↘ＳＢ697
　　↘
　　ＳＢ693→ＳＢ695↗

※建物と直接切り合いがない遺構
ＳＢ698・ＳＢ699・ＳＤ704

重複関係のある遺構のうち建物跡については、ロクロ調整と非ロクロ調整の土師器が混じって出土する傾向があること、赤焼き土器がみられないこと、埋土中に灰白色火山灰が含まれないことより、おおむね９世紀代を中心とする年代を考えておきたい。また ＳＤ704はロクロ調整の土師器が主体で、これに赤焼き土器（註３）が加わること、灰白色火山灰が埋土中に含まれていることから10世紀前半頃とみられる。

7　今回検出した道路跡は、第15次調査で検出したＳＸ580南北道路跡の延長線上にあたり、位置関係からみて『国守の館』の東辺を区画する道路と推察される。

〈註〉

1　相沢清利（1990）：「山王遺跡一第８次発掘調査報告書」『多賀城市文化財調査報告書』第22集　多賀城市埋蔵文化財調査センター

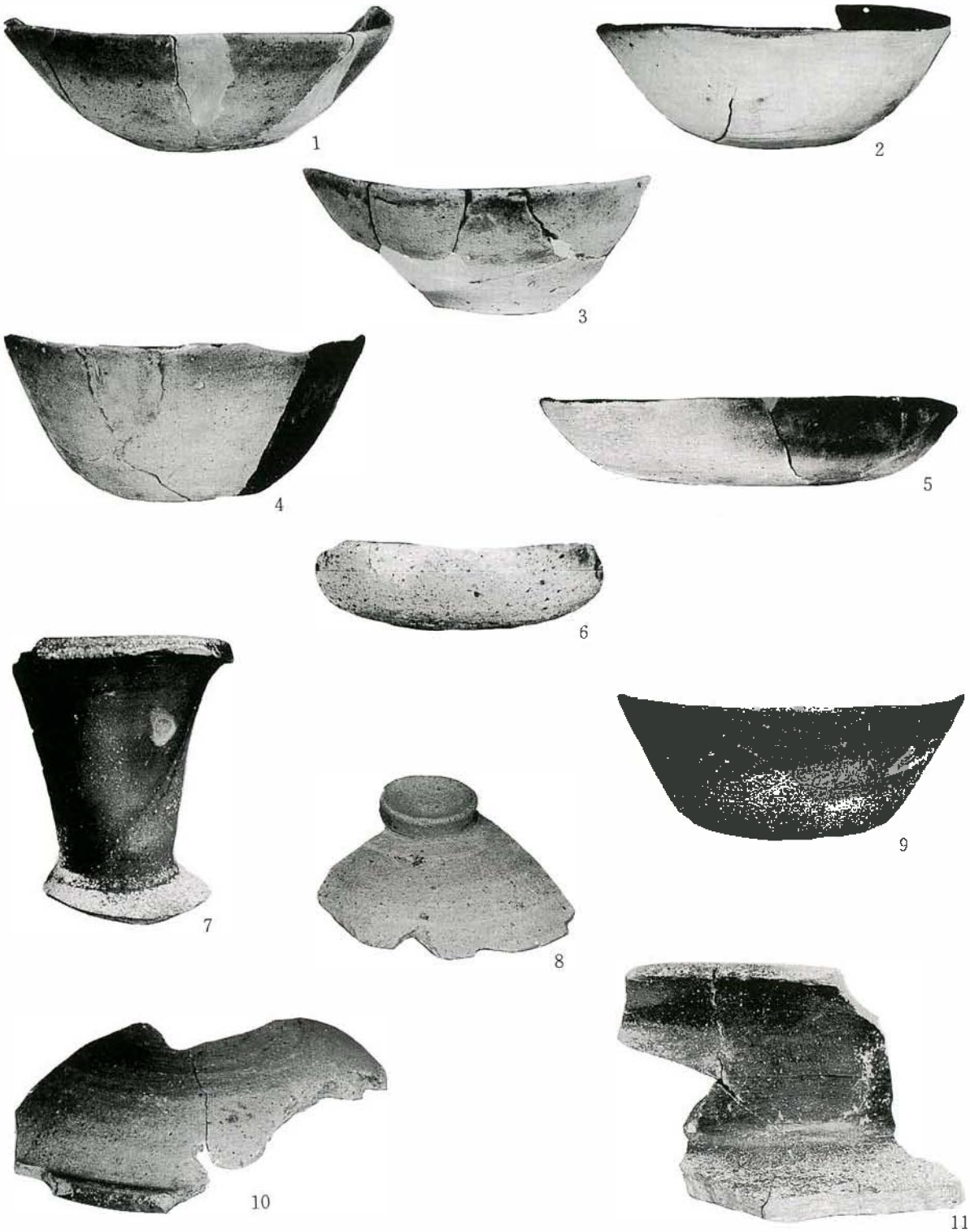
2　菅原弘樹他（1991）：山王遺跡一仙塩道路建設関係遺跡平成２年度発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第141集　宮城県教育委員会

3　多賀城跡・政庁跡本文編（1982）によれば須恵系土器は10世紀前半以降に出現するものと考えられている。本報告書で赤焼き土器としたものは、この須恵系土器と同様のものとみている。

調査区全景（東より）

ＳＸ690道路跡（東より）

調査区西半部遺構群
（東より）



1	土師器	杯（第3図1）	5	土師器	杯　（第3図5）	9	須恵器	杯（第5図3）
2	〃	〃（第3図2）	6	カワラケ	小皿（第5図1）	10	〃	蓋（第5図5）
3	〃	〃（第3図3）	7	須恵器	長頸瓶（第3図6）	11	〃	甕（第4図2）
4	〃	〃（第3図4）	8	〃	蓋　（（第5図4）			

出　土　遺　物

Ⅵ 考　　察

1　山王千刈田遺跡の調査成果について

1.　遺構期と年代

山王千刈田遺跡は、山王遺跡のほぼ中央に位置し、ＪＲ東北本線陸前山王駅の西側に隣接する。本地区周辺は過去に緑釉・灰釉陶器が多量に出土したところとして知られていた。

本調査では掘立柱建物跡22棟、井戸跡２基、土器埋納遺構１基、焼土遺構１基、溝跡31条、土坑46基の他多数の小ピットを検出した。これらの遺構は整地層を介在して複雑に重複していたが、基本的に古い順にA_1期→A_2期→B_1期→B_2期の４期の変遷を確認した。

A_1期は南北・東西方向の小溝群（畑跡）がつくられる時期で、９世紀前半代と考えられる。

A_2期は掘立柱建物跡、焼土遺構、溝跡からなる。建物跡については、いくつかの重複関係が認められ、２～３小期に細分される。規模は後続するB_1期のものに比べ小規模である。方向は北で東に振れるものや、座標北にほぼ沿うものなどがあり規則性は認められない。年代は９世紀後半代と考えられる。

B_1期は掘立柱建物跡、土器埋納遺構、井戸跡からなる。建物跡３棟は北で８度東に振れる方向性をもつことや、柱筋を揃えて建てられていることから、この３棟は計画的に配置された同時期の建物跡とみられる。このうちＳＢ474建物跡は桁行９間、梁行４間の四面廂付東西棟建物跡で、同位置で３回の建て替えが認められている。土器埋納遺構はＳＢ474建物跡の南側に隣接して検出された。方面形は不整方形を呈し、長軸1.4m、短軸0.6m、深さ20cmを計る。掘り方内には、土師器、赤焼き土器杯等が265点以上埋納されていた。井戸跡の井戸枠は、大木を半截しそれをくりぬいて合わせた構造をもつものである。井戸底からは多量の木製品（斎串、立体人形等）が出土している。年代は10世紀前半と考えられる。

B_2期は掘立柱建物跡、溝跡からなる。掘立柱建物跡はB_1期に比べ小規模かつ、若干東に振れる特徴をもっている。年代は10世紀中頃と考えられる。

2.　検出遺構の性格と意義

本調査において４期の遺構の変遷が把握されたが、この中で特に注目されるのはB_1期段階の遺構群である。

この期にはＳＢ474四面廂付掘立柱建物がみられ、その西側にＳＢ478・480掘立柱建物と井戸が配されている。いずれも整地地業（第Ⅳ層）を行った後に構築されたもので、ＳＢ474は

東西棟、他の２棟が南北棟で、建物方向を揃えていることから、これらは一定の規格に基づいて計画的に配置された建物群と考えられる。このうち、ＳＢ474は四面に廂を持つ大規模な建物であるが、こういった四面廂付建物はこれまでの長年にわたる多賀城跡内外の調査でも数例検出されているにすぎない。すなわち、多賀城跡内では政庁正殿跡のほかには六月坂地区で２棟みられるだけであり、城外では館前遺跡のＳＢ02建物跡が唯一の例である。いずれの場合も重要な施設の中心建物であることから考えると、この地区にも何らかの重要施設が置かれており、ＳＢ474は、その中心建物であったとみて差し支えないものと思われる。本例と同様に城外に位置する館前遺跡の場合、四面廂付建物を中心とする６棟の建物群は国司クラスの館跡と考えられており、本地区の性格を考察する上でも注目される見解であろう。

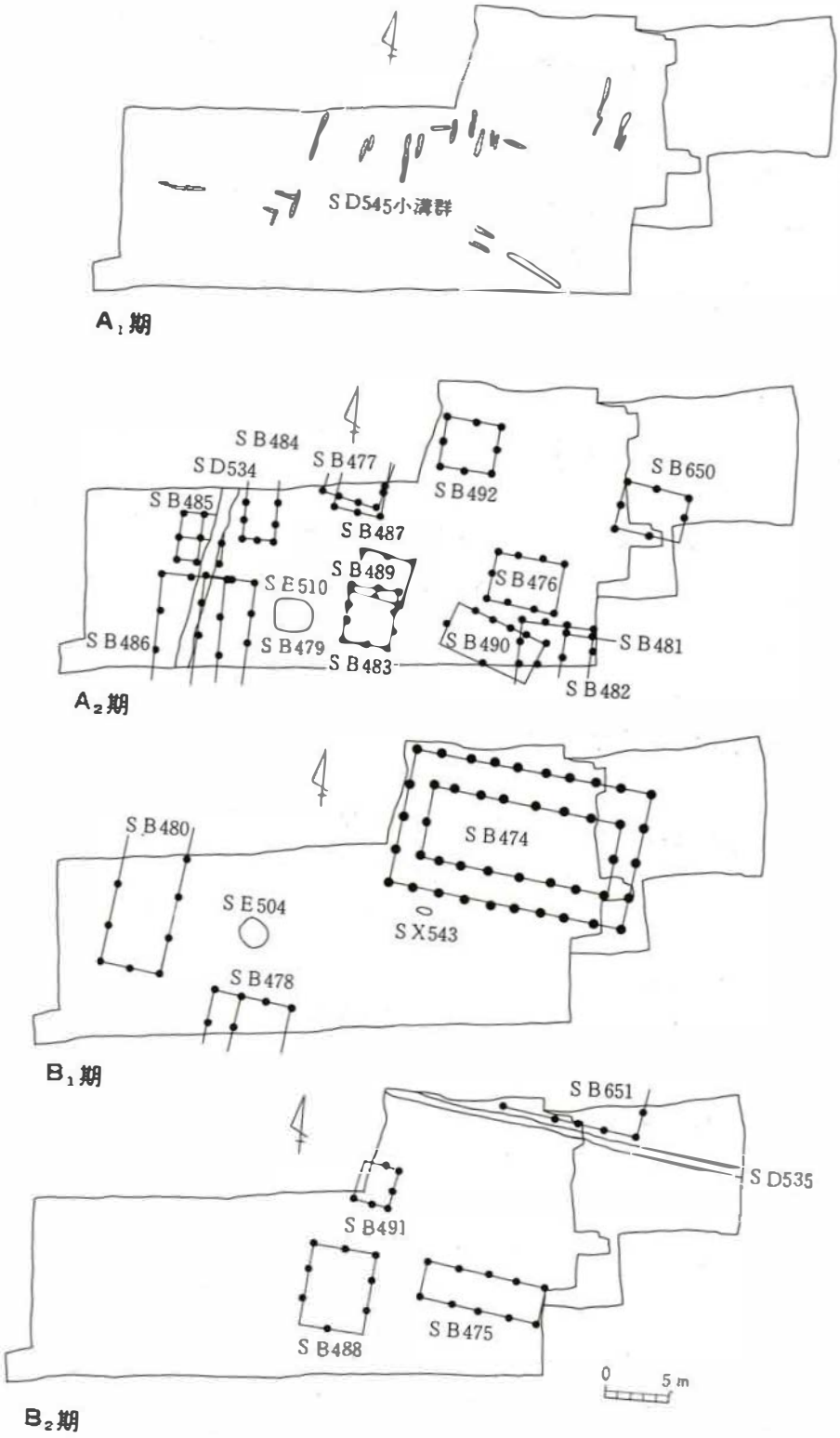
ところでＢ$_1$期の建物群の方向は当教育委員会が実施した第４・８次調査で検出しているＳＸ382東西道路の方向に一致し、ＳＢ474はその推定延長線の北約50mに位置している。この道路は幅が約12mあり、多賀城外郭南辺築地に平行して約５町南を東西に走るもので、当時の主要な道路と考えられるものである。したがって、これらの建物群は多賀城の南辺を基準とした地割内の一郭に整然と建てられていた可能性が高い。

次に出土遺物からみると、本地区からは比較的多量の施釉陶器・中国産陶磁器が出土している。灰釉陶器・緑釉陶器が量的にこれほどまとまって出土した例は多賀城内でもまだみられない。灰釉陶器には内面に金泥が付着したものが含まれており、緑釉陶器には三足盤などの希少な器種もある。また、中国産陶磁器についても多賀城内からの出土自体がきわめて少ない遺物であるが、本地区では青磁水注、褐釉陶器水注などもみられ象徴的である。以上のように施釉陶器・中国産陶磁器の資料からみると、この地区が奢侈製品を豊富に使用していた場であったことを窺い知ることができる。また、墨書土器の中には「厨」と記されたものがあり、本地区の性格の一端を示していると考えられる。

さらに、建物群には井戸が付随しており、その中から櫛や下駄などの生活用品、斎串・人形などの祭祀具、食料残滓とみられる桃の種子等が出土したが、これらはいずれも、ここが日常の生活の場であったことを物語る遺物であろう。

以上に述べたことを総合的に考察し、さらにこの地区が多賀城外であることを考慮すると、今回の調査地は多賀城と密接に関わる場であり、それは実務官衙地域というよりは、むしろ国司のような高級官僚の生活の場、すなわち「館」の中心部分と理解するのが妥当と考えられる。

さらに、ＳＢ474c柱穴掘り方埋土から出土した木簡は、本建物跡の性格を示す好資料となりうるものである。本木簡の解釈については別稿の平川氏の報文のとおりである。陸奥国と右大臣との間にやりとりがあったことを示すもので、当国側でその任にあたったのは『国守』であるという。


SD545小溝群
A₁期
SB484
SD534
SB477
SB485
SB487
SB492
SB650
SB489
SE510
SB476
SB486
SB479
SB490
SB481
SB483
SB482
A₂期
SB480
SB474
SE504
SX543
SB478
B₁期
SB651
SD535
SB491
SB488
SB475
0
5 m
B₂期

第1図　主要遺構変遷図

今回の調査で発見されたＳＢ474 四面廂付建物跡を中心とする建物跡及び井戸跡等の遺構は国司の館を構成するものと考えられることは先に詳しく述べたが、木簡の解釈によって、さらに『国守の館』である可能性がきわめて高くなった。

これまでの30年間にわたる発掘調査によって古代の多賀城については数多くの事実が明らかにされてきたが、『国守の館』や古代末から中世にかけての「多賀国府」がどこにあったのかという２点が、未だ解明されていない大きな問題点として残されていた。今回『国守の館』跡とみられる中心部分が検出されたことは多賀城をめぐる年来の課題の一つに解決の糸口を得たことになる。

全国的にみて古代の「国府」が発掘調査によって解明されている例はいくつか挙げることができる。しかし、『国守の館』が発見された例は未だに皆無である。今回、陸奥国の多賀城で『国守の館』跡が発見されたことは、ひとり多賀城の解明に役立つのみならず、古代日本の国府のあり方を究明する上でも極めて大きな意義を持つものである。

2　多賀城周辺(国府域)の調査成果について

多賀城周辺の発掘調査は当市教育委員会により昭和54年の館前遺跡から本格的に開始され、その後の継続的な調査によっていわゆる国府域の様相が明らかになりつつある。ここでは、山王千刈田遺跡（第９・18次調査）に関連する山王遺跡内で発見された道路跡を中心に検討し、『国守の館』全体の範囲を明らかにしてみたい。

はじめに、山王遺跡における古代の遺構の変遷・様相について八幡地区（註１）を例にとってみると次のようになる。

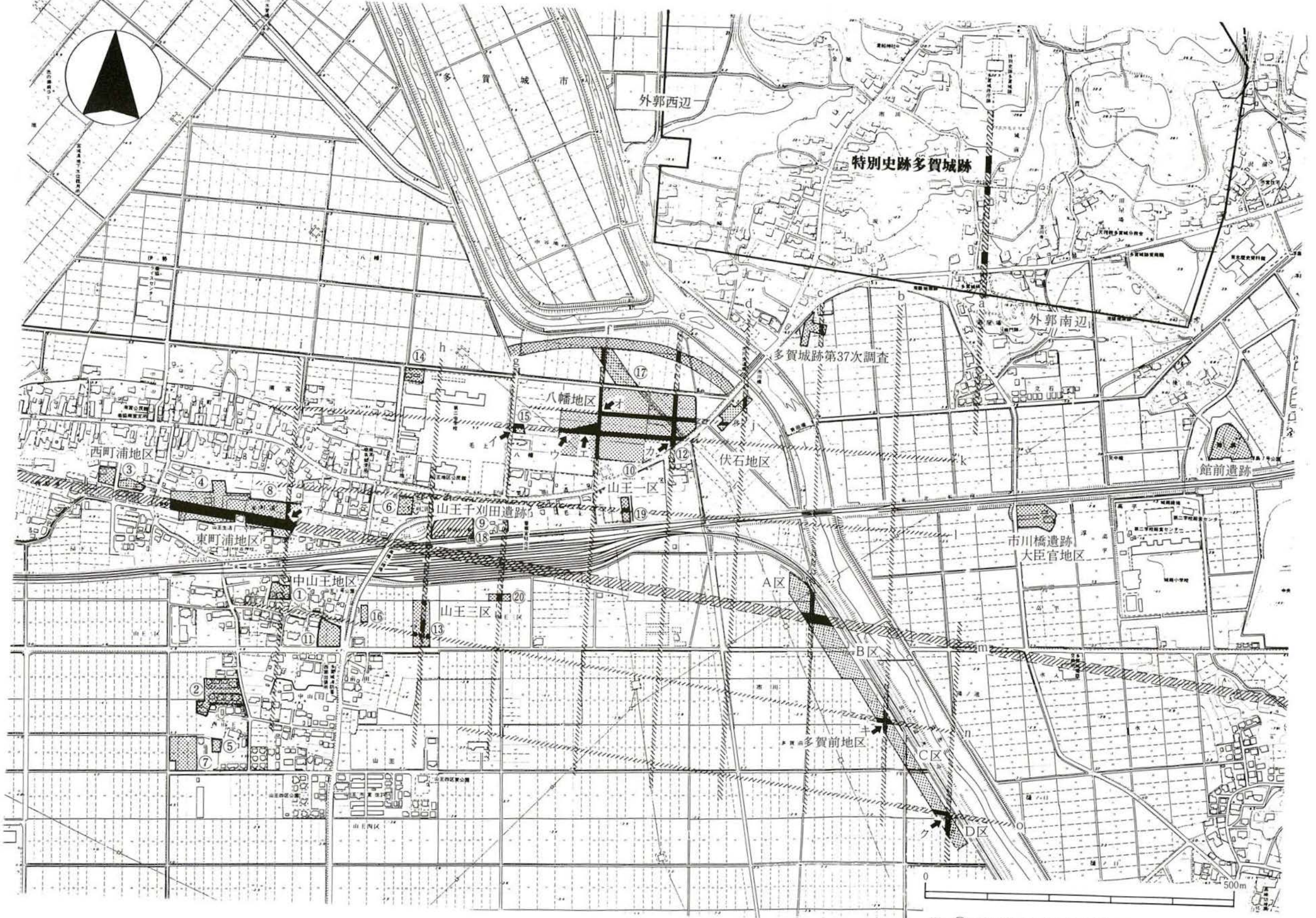
奈良時代の遺構は小規模な建物跡や竪穴住居跡・井戸跡が発見されているが、いずれもその数は少なく散在的である。しかし、「コ」の字に巡る溝や柱列も検出されてきており、地割りの存在の可能性もある。

平安時代の前半は道路をはじめ都市計画的な整備が行われ、遺構も増加する。道路による方格地割り内には掘立柱建物跡、井戸跡、畑跡などが配置されており、宅地内における土地利用のあり方が具体的に把握できるようになってきている。

平安時代の後半になると遺構が激減し、地割りそのものも崩壊していく。

次に『国守の館』の存続期間に相当する平安時代前半の様相について、道路跡を中心にさらに詳しく述べることにする。

これまで多賀城周辺（主に山王遺跡）で発見されている道路跡は、南北道路が９本、東西道



※ ①～⑳は当市による山王遺跡の調査次数を示す。

第２図　多賀城周辺における方格地割（道路遺構）

路が6本を数える（第2図参照）。その広がりは、多賀城外郭南辺築地から南に7町、政庁中軸線から西に9町まで及んでいる。(註2）。道路に伴う施設としては、側溝、橋、路面の舗装（整地・バラス敷）などが確認されている。規模は幅12mのものと、幅3～4mのものとがあり、各道路間の距離は約1町（109m）を計るものが多い。 方向は多賀城政庁中軸線（ほぼ真北）に沿うものと、外郭南辺（北―7°～8°―東）のものとがある。道路側溝埋土には10世紀前半に降下した灰白色火山灰が認められ、これを挟んで3～4時期の変遷が確認されている。道路に係る祭祀としては、山王遺跡東町浦地区（第4次調査）で土器集積遺構、山王遺跡東町浦（第8次調査）・八幡地区で土器埋納遺構（第2図ア～ク地点）が検出されている。前者は万燈会などの仏数行事、後者は道路建設に伴う地鎮と考えられている。

このような道路跡の状況から、多賀城周辺（南面一帯）には外郭南辺築地から約5町南の位置に築地の方位を範とした幹線道路（幅12mの東西道路）が通っており、その周辺には東西・南北の道路による方格地割りがなされていた。そしてこの方格地割り内には階層ごとの住み分けがあったようで、幅12m道路に面した区割りでは『国守の館』（山王千刈田遺跡）や庭園遺構（山王遺跡多賀前地区B区）など重要な施設が検出されている。一方、12m道路から離れた区割り（山王遺跡八幡地区・多賀前地区C区）では小規模な建物、井戸、畑で構成されている。前者は上級官人の館、後者は下級官人あるいは一般庶民の居住地と考えられる。

さて、以上のことを踏まえながら『国守の館』と推定された山王千刈田遺跡（第9・18次調査）の範囲を道路との関係でみていくと、西は第13次調査（h）、東は第15・20次調査（g）で検出した道路で区画され、北は第19次調査（l）、そして南は幅12mの東西道路（m）で区画されていることがわかる。このことから『国守の館』は幅12mの主要道路に面した方格地割り内に位置し、1町を基調とした敷地を有していたと考えられるのである。

〈註〉

1　菅原弘樹（1992）：「山王遺跡―仙塩道路建設関係遺跡平成3年度調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第147集　宮城県教育委員会

2　高橋栄一（1992）：「山王遺跡・多賀前地区」『平成4年度宮城県発掘調査遺跡発表会・発表要旨』

3

多賀城市山王千刈田遺跡の木簡について

国立歴史民俗博物館

平川　南

一、釈文

・右大臣□餞
・□□馬□収文
・餞馬大□臣□
収文

長さ(五五mm)×幅三六mm×厚さ八mm

二、形状

この木簡は題箋軸とよばれるものに属する。短冊形の一枚の板から削りだして題箋部と軸部を作る。この木簡は軸部が根元から欠損している。題箋部は片面は右下部と左側面、もう片面は右上部と右側面がそれぞれ抉り取られたように木簡面がほとんど失われている。材の保存状況もそれほどよいとはいいがたい。

三、内容

題箋両面の内容は全く同文と判断できる。正倉院文書中の題箋の例にも、表裏同文のものは数多くみいだせる。上記したように木簡面の傷みが甚だしいが、幸い表裏同文であることが確認できたので両面を相補って完全な釈文を付すことが可能となった。

「右大臣」は太政官の長官で左大臣につぐ重職である。「餞」は文字どおり餞別のことで、「餞」を『新撰字鏡』（わが国現存最古の字書、八九二年選述、九〇〇年増補）によれば、「馬乃鼻牟介（うまのはなむけ）」と訓んでいる。したがって、「餞馬」は餞別のための馬のことである。「収文」は通常、諸国の貢納物に対する中央の役所の受取状のこととして用いている。

全体の内容については、次の三通りの解釈が成り立ち得るであろう。

① 陸奥守に任命された者が陸奥国下向に先立って右大臣に挨拶を行い、そこで右大臣から餞別の馬を送られた。

〈参考〉『日本紀略』天元三年（九八〇）七月二十五日条

太政大臣二於職曹司一餞二出羽守源致遠赴任一有二和歌一

② 当時、陸奥国の按察使は大納言までは兼任しているが、右大臣に昇進すると、按察使の職を辞するのが常であった。そこで陸奥国守は、東北地方の最高行政官〝按察使〟が右大臣に昇進するにあたって餞別として陸奥国の最高の贈り物・馬を進上したと考えられる。もちろん、按察使は在京しているが、陸奥国を任地とする建前から

一種の儀礼として右大臣への貢馬を〝餞（うまのはなむけ）〟と表現したのであろう。陸奥国守から餞別の馬が都の右大臣家に送られその収文（受取状）が陸奥国司宛に送付されたと考えられ、その一連の文書（送る際に付せられる陸奥国司解文の案文等）に題箋を付して保管していたのであろう。

③　②の場合の陸奥国において、右大臣への餞馬を国内から調達した際の受取状を保管していたものではないか。

これら三点のうち、いずれのケースが最も可能性が高いかは、以下若干の考察を加えてみよう。

収文の用例

(a)　『三代実録』元慶五年四月二八日条

先レ是。去年四月八日。大膳史生矢田部氏永。奸私作二諸司収文一。偸二取淡路国塩代米五十斛余一。自レ此奸二作備前讃岐等米収文一之事発露。出納諸司坐二此事一。下レ獄者衆。（下略）

(b)　『延喜主計式』

凡畿内諸国所レ進調銭。勘二定調帳一之日。具録二銭数一。移二送穀倉院一令レ納。其収文待二従レ官下一勘会。

(c)　『延喜主計式』

凡鋳銭司所レ進年料銭。随二所進数一。且附二綱丁一収二収文一。至二十年終一令レ進二惣帳一。勘会已訖乃与二返抄一。

(d)　『延喜主計式』

凡諸国貢調並雑物綱丁等。若失二諸司収文一有レ申レ官者。官先令二所司勘一之。即加二外題一。経レ省下レ寮。更写二前収文一。具注二其由一。允属共署。捺二寮印一与之。

まず四例すべて「収文」が諸国からの貢進物に対して中央の諸司が発する受取状の意として用いられている。たとえば、(a)は大膳史生矢田部氏永が、諸司の収文を奸作し淡路国米五十斛余を偸取したことが発覚し、追求の結果さらに備前讃岐等の収文をも奸作していたことも明らかとなり、出納諸司官がこれに坐して下獄する事件である。その点は次の例も同様であろう。

『類聚三代格』承和十年三月十五日太政官符

調庸並雑交易等物納畢之日、郡司綱領受二取諸司諸家返抄収文一付二授雑掌一、雑掌為レ請二返抄一与二寮官一共勘二会抄帳一、若寸絹摂米有二未進一者、不レ与二返抄一。

この史料からは、調庸並びに雑交易等を納めた日に郡司が諸司諸家より受け取ったのは返抄・収文であり、収文は主計寮において返抄請求のために抄帳と勘会されることが知られる。そして未進があった場合は返抄は与えられないのである。結局、収文の性格は、すでに俣野好治氏が指摘しているように現納分についての仮領収証とでもいうべきもので、未進数勘出の役割をもっていたといえる

（「律令中央財政機構の特質について―保管官司と出納官司を中心

に―」「史林」六十三巻六号　一九八〇年十一月）。

以上の収文の用例からは、①の場合のような右大臣家から陸奥守への餞馬の収文とは理解しがたいであろう。右大臣家から下向する新任の陸奥守に餞馬する場合、陸奥守が収文を発することは、収文の例がいずれも中央の諸司が発するものであった点からしても考えにくく、さらに陸奥国府において、題箋を付けた収文を保管していた状態も説明しにくいのではないだろうか。

「右大臣殿餞馬」の用例

『権記』長保二年（一〇〇〇）九月十三日条

奏文並宣旨等注二目録一。退出詣二左府（左大臣）一。下二宣旨一。帰宅。

出羽守義理朝臣所レ送書状並貢馬解文等。彼息男為義持来。左大殿（左大臣殿）

貢馬六疋解文在レ別。（下略）

出羽守が都の左大臣殿に貢馬した史料であるが、この「左大（臣）殿貢馬六疋解文」という表記を参照すれば、「右大臣殿餞馬」は①の右大臣殿からの餞馬の意ではなく、②③の右大臣殿に対する餞馬と解することができるであろう。ただし、③は陸奥国内からの馬の調達であるから、収文は国司の側にのこされるのは案文であるが、この題箋には〇〇案とはない。

以上の検討からは、②のケースが最も可能性が高いであろう。②の場合はいくつかの付帯条件を考慮しなければならないが、この場合は先に述べたようにあくまでも按察使は在京しているが、陸奥国を任地とする建前から、右大臣昇進とともに按察使を辞することは陸奥国を離れる行為とみて、〝うまのはなむけ〟という名目のもとに貢馬したと理解するのである。この陸奥国司から右大臣への餞馬はおそらく陸奥国の貢馬の一形態として慣例化し、その貢進に対して右大臣家から収文が陸奥国司に与えられたと想定することができるであろう。

なお、参考までに大納言兼按察使として、右大臣に昇進した人物を一応九世紀末から十世紀前半までの間で『公卿補任』でみてみると、つぎのとおりである。

昌泰四年九〇一（右大臣任、以下同じ）	従三位源光
延長二年九二四	正三位藤原定方
承平三年九三三	正三位藤原仲平
天慶七年九四四	正三位藤原実頼
天暦元年九四七	従二位藤原師輔
康保四年九六七	正二位藤原師尹

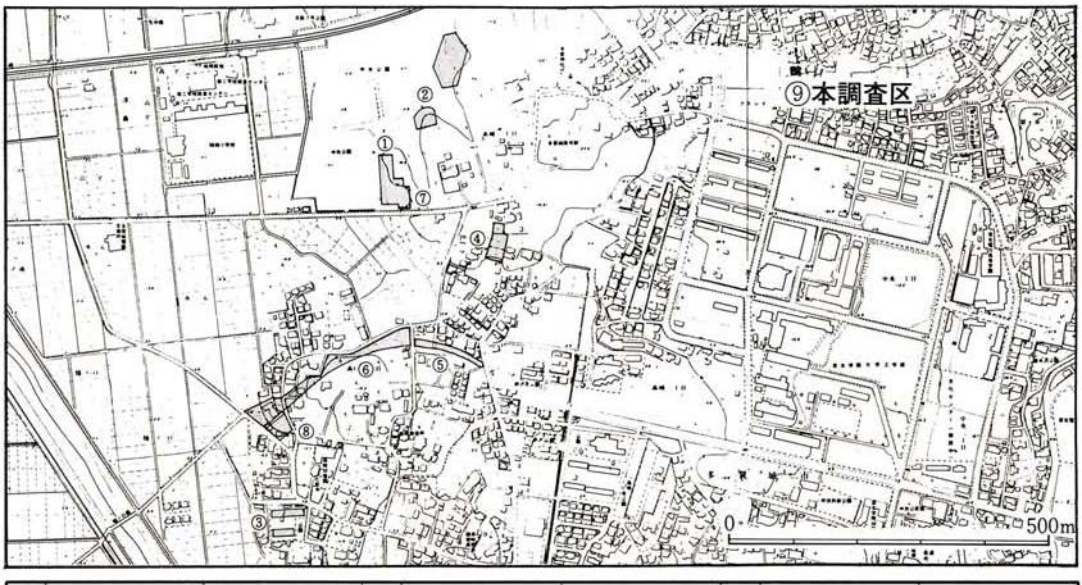
本遺跡は遺構・遺物などの考古学的検討からも国司の館と想定する有力な根拠となるし、さらに国守の館であるという可能性も提示できるきわめて重要な資料であるといえよう。また、本遺跡の年代は十世紀前半とされている。この時期は、律令体制の衰退とともに地方政治が大きく変質を遂げるのである。地方政治の中心となる国府においても、しだいに国司の館の役割がその重要性を増してくる時期でもある。（鬼頭清明「国司の館について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第十集　一九八六年）。

Ⅶ　高崎遺跡第９次調査

１　高崎遺跡の立地と環境

高崎遺跡は、多賀城市高崎・留ヶ谷地区に所在し、特別史跡多賀城廃寺跡を取り巻くように位置している。本遺跡が立地している低丘陵は、松島丘陵から派生したもので、塩釜市方面から西へ延び、多賀城市北部で沖積地に接している。

本遺跡は、奈良・平安時代から近世にかけての複合遺跡であり、これまでに実施された発掘調査では、平安時代の掘立柱建物跡・竪穴住居跡や井戸跡等が検出されたほかに、弥勒地区、表地区、井戸尻地区の３箇所で甕棺の出土例がある。



No.	調査年次	調査年度	No.	調査年次	調査年度	No.	調査年次	調査年度
①	第１次調査	昭和55年度	④	第４次調査	昭和60年度	⑦	第７次調査	昭和63年度
②	第２次調査	昭和56年度	⑤	第５次調査	昭和61年度	⑧	第８次調査	平成３年度
③	第３次調査	昭和57年度	⑥	第６次調査	昭和62年度	⑨	第９次調査	平成４年度

第１図　調査区位置図

２　調査に至る経緯と調査方法

本調査については、平成４年６月に地権者の佐藤博氏より鉄筋コンクリート３階建住宅の建築計画が提示されたため、本件の取り扱いについて当市教育委員会社会教育課が協議を行った。当該地は、高崎遺跡の範囲の北東部に位置することから、古代の遺構の所在が考えられるため地下遺構の状況を把握する必要性が認められた。住宅の建築については、協議の結果、地下の遺構に影響を及ぼさない工法がとられることとなったため、遺構確認調査として実施することになった。この協議に基づき、地権者の承諾を得て、平成４年９月より本調査を開始した。

調査の方法は、今回の調査対象面積が179㎡と小面積であるため、東西方向に幅約2ｍのトレンチを北側と南側に2本設定し、北側を第1トレンチ、南側を第2トレンチとした。

3　調　査　成　果

〈地形と基本層位〉

今回の調査区は、本遺跡が立地する低丘陵の北斜面にあたり、ゆるやかに北西方向に傾斜している。

本調査区内の基本層位は、南半部に盛土がされ、その下層には旧耕作土（Ⅰ層）が20～30cmの厚さで調査区全域にみられる。Ⅱ・Ⅲ層は第1トレンチのみで確認している。Ⅱ層は褐色土を基調に厚さ約10cmを計り、Ⅲ層は暗褐色土を基調とし、10～15cmの厚さで自然堆積している。

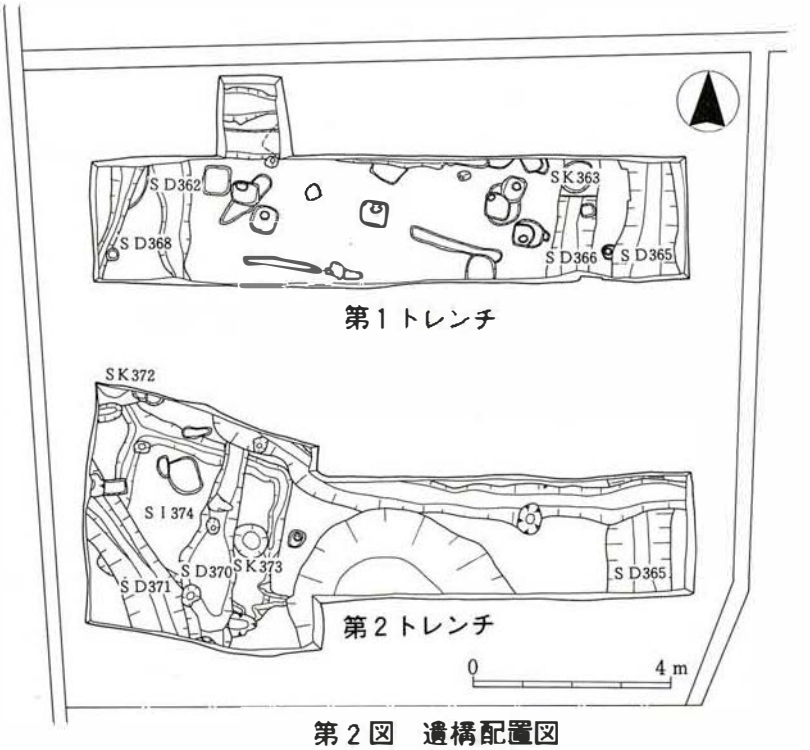
〈第1トレンチ〉

第1トレンチにおいては、溝跡9条、土坑2基、柱穴多数を検出している。

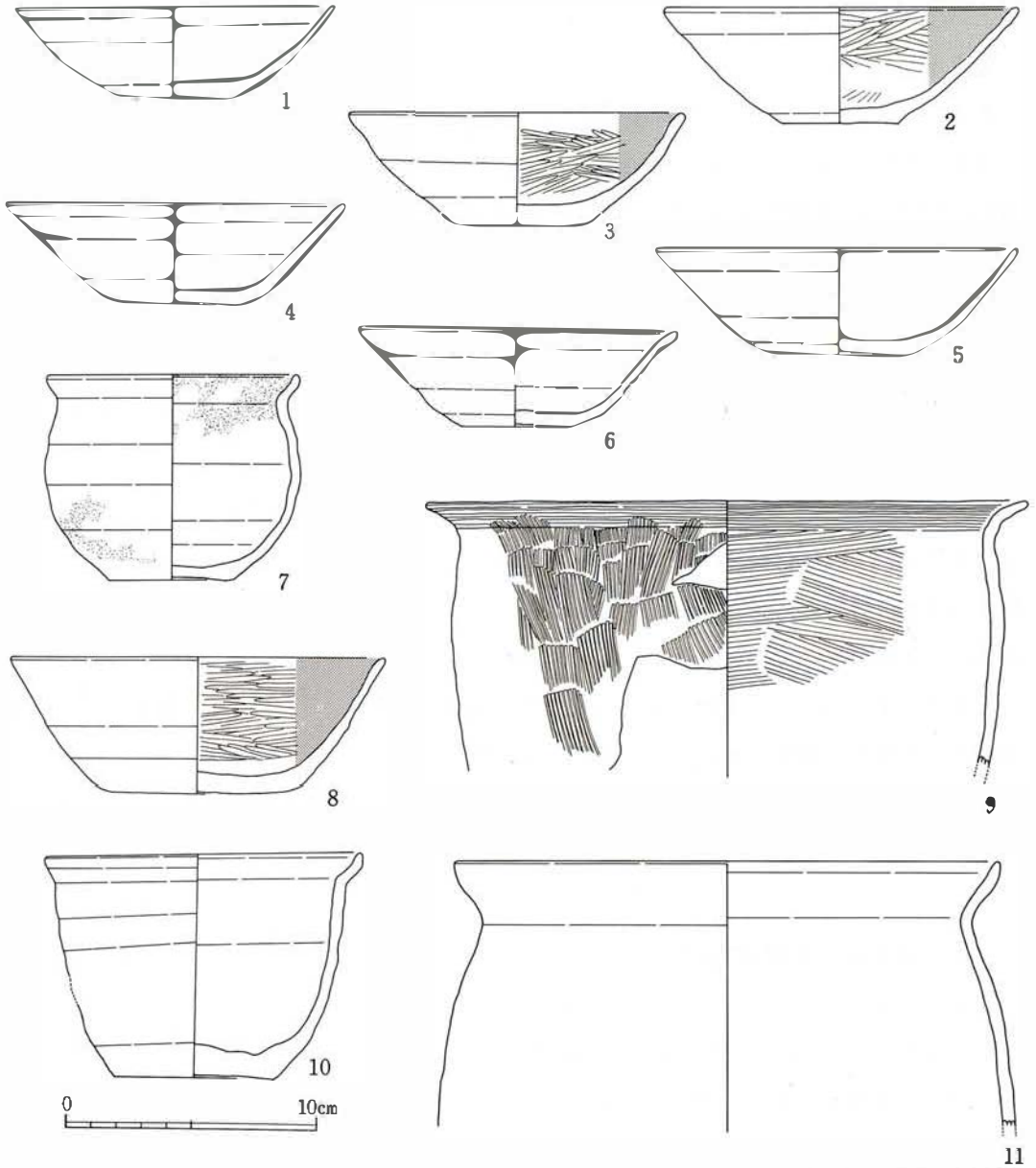
ＳＤ365は、トレンチの東側において検出した南北に走る溝であり、第2トレンチにおいても検出している。長さは約 8.7m 以上で、上幅約 1.4m、深さ40cmを計る。埋土は4層に分けられるが、褐色シルトを基調としている。遺物は、土師器杯・甕、須恵器甕が出土している。

ＳＤ366は、トレンチの東側で検出した南北に走る溝である。重複関係からＳＫ363よりも古い。長さは2ｍ以上で、上幅約 0.8m、深さ約20cmを計る。埋土は2層に分けられるが、褐色シルトを基調としている。遺物は、土師器杯・甕、須恵器甕が出土している。

ＳＫ363は、トレンチの東側で検出しており、重複関係からＳＤ366 よりも新しい。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸約75cm、短軸約60cm、深さ約10cmを計る。埋土は、褐色シルトの単層である。遺物は、土師器甕、赤焼



第2図　遺構配置図



単位：cm（　）は推定値

No.	種別	器種	遺構・層位	外面調整	内面調整	口径	底径	器高	図面No.	備考
1	赤焼き土器	杯	SK363 ℓ－1	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	12.8	4.7	3.6	1	
2	土師器	杯	SK373 ℓ－2	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	14.1	4.6	4.7	2	
3	土師器	杯	SK373 ℓ－1	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	13.5	5.3	4.5	6	
4	赤焼き土器	杯	SK373 ℓ－1	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	13.7	4.8	4.0	5	
5	土師器	杯	SK373 ℓ－1	ロクロナデ、底部：回転糸切り	摩滅	14.4	5.5	4.3	4	
6	赤焼き土器	杯	SK373 ℓ－1	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	12.8	4.3	4.0	3	
7	土師器	甕	SK373 ℓ－1	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	10.8	5.0	8.2	7	内・外面油煙付着
8	土師器	杯	SI374 ℓ－3	ロクロナデ、体部下端～底部：回転ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	15.0	7.0	5.3	8	
9	土師器	甕	SI374 ℓ－1	口縁部：ヨコナデ、体部：ハケメ	口縁部：ヨコナデ、体部：ナデ	(24.0)	—	—	9	
10	土師器	甕	SI374 ℓ－3	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	12.8	6.6	9.0	10	
11	土師器	甕	SI374 ℓ－3	ロクロナデ	ロクロナデ	(21.8)	—	—		

第3図　SK363・373・SI374出土遺物

き土器杯が出土している。

〈第2トレンチ〉

第2トレンチにおいては、竪穴住居跡1軒、溝跡4条、土坑4基、小柱穴を検出している。

ＳＩ374は、トレンチの西側で検出しており、重複関係からＳＤ370・371、ＳＫ367・372・373よりも古い。平面形は隅丸方形を呈し、長辺約3.6m、短辺約3.3mを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面は平坦で、カマド付近に焼土がみられる。周溝はカマドを除く住居の壁にそって巡り、北西隅から住居外へ延びている。カマドは東壁の南側に付設され、燃焼部と煙道部からなる。煙道部の現存する長さは約0.45mを計る。堆積土は3層に分けられるが、褐色シルトを基調としており、炭化物を含んでいる。遺物は、カマド内やカマド付近から土師器杯・甕等が多く出土している。

ＳＤ371は、トレンチの西側で検出した斜めに走る溝である。重複関係からＳＩ374より新しく、ＳＤ370よりも古い。確認できる長さは約4mで、上幅0.9～1.3m、深さ約30cmを計る。埋土は4層に分けられ、第1層は暗褐色シルトで、第2～4層は褐色シルトを基調としている。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶が出土している。

ＳＫ373は、トレンチの西側で検出しており、重複関係からＳＩ374よりも新しい。平面形は不整円形を呈し、規模は径約75cm、深さ約45cmを計る。埋土は3層に分けられるが、褐色シルトを基調としている。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯、赤焼き土器杯が出土している。

4　まとめ

今回の調査は、遺構確認調査として実施したため遺構の規模や性格等について詳細することはできないが、成果について以下にまとめることにする。

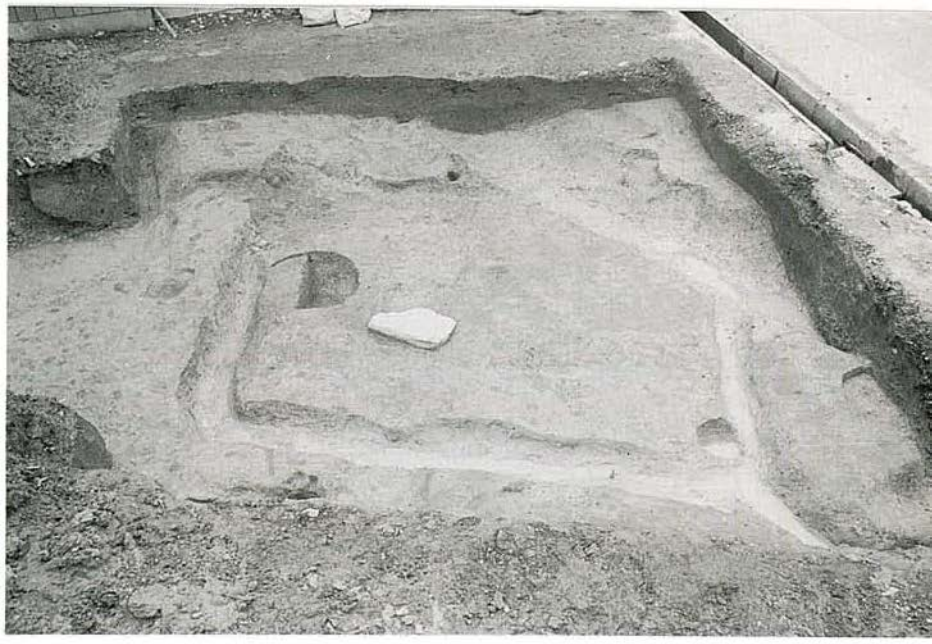
1　第1トレンチで検出したＳＤ365・366溝跡やＳＫ363土坑の年代については、埋土にロクロ調整の土師器や赤焼き土器が含まれていることからおおむね10世紀代と考えられる。

2　第2トレンチで検出したＳＩ374住居跡の年代は、住居跡の周溝を灰白色火山灰を含むＳＫ372土坑によって切られることや住居跡からロクロ調整の土師器が出土していることからおおむね9世紀後半頃と考えておきたい。また、ＳＤ370・371溝跡やＳＫ373土坑の年代は埋土中にロクロ調整の土師器や赤焼き土器が含まれていることからおおむね10世紀代と考えておきたい。

3　今回の調査区は、多賀城廃寺跡の東方約350mに位置しており、小規模な面積にもかかわらずこれだけの遺構が検出されたことは、多賀城廃寺を取り囲む本遺跡の集落のあり方を解明するうえで貴重な資料が得られたものと考えられる。

第２トレンチ西半部
（北東より）

Ｓ１374住居跡（北より）



ＳＫ373土坑
土器出土状況（西より）

1

2

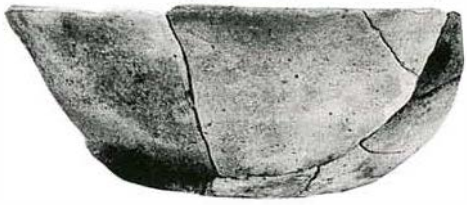
3

4

5

6

7



9

1	赤焼き土器杯	SK363	第3図1		6	土師器杯	SK373	第3図3
2	土師器〃	SK373	〃 2		7	〃 甕	〃	〃 7
3	赤焼き土器〃	〃	〃 6		8	〃 杯	〃	〃 8
4	土師器〃	〃	〃 5		9	土師器甕	SI374	第3図9
5	赤焼き土器杯	〃	〃 4		10	〃 〃	〃	〃 10

出　土　遺　物

多賀城市文化財調査報告書第34集

山　王　遺　跡 ほか

— 発掘調査報告書 —

平成5年3月31日 発行

編集
発行　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電　話（022）368－0134

印刷　渡　辺　印　刷
塩釜市旭町17番13号
電　話（022）364－3161